

平成29年(西暦2017年)05月

瞑想録(その19)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここにあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私は、世の中には実は現状よりもずっと面白くて自由な物があるはずで、現代人はまだ十分にその視野を広げていないと信じています。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2017. 02. 25

1、三島由紀夫とは

私にとって三島由紀夫は難解な人物である。彼の代表的著書の「豊饒の海」とか「金閣寺」とか「春の嵐」とか、チャレンジしてはみたものの結局訳が分からなくなっている。私も挫折している。私が彼を理解できない理由が彼の論理構成が難しいからなのか、あるいは彼と同じ感情や境遇になった体験がないからなのか、そのどちらかなのかも分からない。外人にも彼は不可解な日本人の典型的側面と映るらしくて、良く聞かれるがおよそともに答えられていない。

彼は自衛隊をまねて私設軍隊の「盾の会」を作り、自衛隊に押しかけて蜂起を呼び掛け、そして最後には自殺した。この一連の理由と心象の推移も今一分からなかった。しかも時代的には学生運動即ち三島とは対極の世界同時共産革命が起ころんとしたその瞬間であるのに、その反動でもなくたまたま単に時期が重なっただけのようだ。彼は学生運動の連中に呼ばれて東大で講演をしたが、その時に「君たちが一言天皇

瞑想録(その19)

と言えは私も君らと一緒に籠った」と言ったという。この発言がカリカチュアだとは思えないが、多分「現実離れした理想主義者としては似た者同士だ」と言う意味ではないか。

ところで私は最近、若松孝二監督が三島の切腹までを描いた映画である「自決の日」を見た。きっかけは戦前の青年将校の決起事件である「二二六事件」について、三島の思想を知るためである。これは皇道派の青年将校たちが天皇を思って佞臣たちを始末しに立ち上がったものの、逆に天皇によって逆賊とされて汚名のまま処刑された事件である。この処断について私は、「この処置は当時の時代背景上仕方なかったとしても、80年たった今赤穂浪士程度には名誉回復があって良いのではないか」と思っている。そうしていたところ、「三島にも同様の思いがあって盾の会や決起呼びかけや切腹をした」と聞いたからである。

ちなみに二二六事件の背景には、その数年前に起きた世界恐慌が日本にも波及して特に農村が疲弊したことへの義憤があった。だがこの時本来起きるべきだったのは、軍の決起ではなく共産主義革命だったのではないか。私は共産主義が嫌いなので、「この時にソ連が攻め込んでなくて良かった」と思っている。また日本で70年代初期に学生が左翼化して暴動したもののその後挫折したことの根本的間違いは、この二二六の時に立ち上がるべきだったのをそのタイミングを読み間違えたからだと思っている。逆に言えば学生運動の時になぜソ連や中国が便乗して介入してこなかったのか、こちらの方が不思議である。これはやはり日米安保体制下の、米国の存在感だったのだろうか。

話を戻すとこの映画の中で三島は、「彼の二二六関係の思想と評価は短編の『英霊の声』にまとめた」と言っていた。そこで私も「英霊の声」を読んでみた。この文庫本には「英霊の声」の他に「憂国」と「十日の菊」の2作品も入っていて、これらはいずれも短編で論旨も明確なので読み通し得た。この短編で三島は、「昭和天皇には少なくとも2回すなわち二二六と終戦直後の人間宣言の時だけは神であって欲しかった」と主張している。

彼の主張は明治維新後の、絶対君主制下に於ける「天皇＝神」論にそのまま立脚している。だが天皇制2600年の歴史を見ると特に古代では必ずしもそのような絶対視はない。八百万の多神教であり、神々ももっと身近な存在だ。三島が古事記や日本書紀を読んでいないとは思えないので、そのようなことを三島は分かっていたと思う。それにもかかわらず彼の美学はいわば「一神教的天皇」に対する彼の片思いであり、昭和天皇個人にとってはむしろ迷惑なほどの理想の押し付けがあるように思う。

瞑想録(その19)

私はかつて「昭和天皇と帝王学」(高瀬広居)を読んだことがある。この本によると昭和天皇の教育はむしろ、神道のみならず仏教も世界情勢も広く学んで頂く開明的実践的教育であったことが分かる。つまりこと二二六に関する限り昭和天皇は当時の行き過ぎた皇道主義を苦々しく思っていたのであり、三島の偶像化と真実とは真逆である。そしてこの真逆なところにこそ、三島理解の糸口があるように思えた。

先の文庫本に戻るとその中に三島の、「若いとは美であり、老いるとは醜悪であり、人生とはひたすら醜怪に至る道である」と言う言葉があった。これを見た時に私は、「三島の美学はこの一言に集約されている」と思った。現実には死体は2時間もすれば死後硬直が始まるし、2日もすれば腐って異臭を放つ。だがそんな現実三島にはどうでも良いことなのだ。彼にとって美とは若い日の情熱であり、老いることは情熱が過ぎ去って醜さだけが残ることなのだ。

三島は頭が切れる。彼の作品は何段にも複雑に仕組まれた曇天返しの連続だ。そしてそこまで頭が切れてほとんど気違いの三島の美学とは、「若いうちに死ね、だが若いことは同時に壊れやすい危うさと隣り合わせだ」と言う一種のスリルではないかと思う。これほど頭の冴えた人が現実には器用に対応するのでなく逆に固定したイデオロギーに固まるというのは不思議ではあるが、実際にそうなのである。

実は私は20年ほど前に、三島の作品をTVで見ている。「光クラブ事件」を題材にした「青の時代」であり、TVでは「蒼の光茫」と言う題になっていた。この実話に基づいた話のモデルは東大生にさもありがちだが、世の中をバカにしてあくどい高利貸しをやり最後はにっちもさっちもいなくなって自殺した人物である。TVでは主人公を最近没した根津甚八が演じていたが、この話特に「死による清算」に三島が目を付けて自分流に脚色したのは、当然の成り行きだろう。

腐った世の中を騙すことは悪でなく頭の良い者の特権であり、最後に主人公が死ぬのはその悪の華の完成であるというのが三島も解釈であった。これは将来における三島の死に方を予告している。三島の思想とはつまるところ平田神道や武士道が維新後に神国日本に昇華されたその「純粹日本」であり、その本質は「天皇神と死の美」という一点に集約できるのではないかと思う。

彼の自死の理由は死ぬ勇氣と言うよりは、自分が老いることへの恐怖であったのではないか。むしろ一種の恐怖死であり、同時に彼の美学の完成でもあったのだろう。

2、好きと嫌い

本日は私が個人的に好きなことと嫌いなこと、及びその選考基準をまとめます。基準とか言いながら具体例から始まるのですが、私はいわゆる「ステージ物」に行ったことがありません。ステージ物とは要するに合唱グループとか演劇集団とかそういう人たちの興行物です。

ステージ物に行かない一番の理由は私自身の不勉強により、これらの楽しさを理解できなくて満喫しないからです。それにしてもステージ物は座席代が高い。普段行く先々でチラシ集めもしているのでこの手のステージ物のチラシも掴むのですが、平気で1万円とかしている。ちょっと触手が伸びません。

そしてこのステージ物、単に高いだけでなく私が事物を敬遠する諸理由が全部揃っていて、「選考しない」の好例になっています。具体的には①代金のほとんどが人件費である、②行く時間が決まっていて「仕事」になってしまう、③他人の楽しみにわざわざ追い銭をしている、と言う3大要因です。

人によっては会社勤め等の仕事は、「時間がつぶせる上に金が入ってこんな結構な物はない」という人も結構居ます。ですが私は正反対で自分が死ぬほど嫌な思いをして時間をドブに捨てて稼いだ金を他人に飯を食わせるために、しかも自分の趣味の延長で楽しくてやっている人の為に決して1円たりとも垂れ流したくありません。そして私の仕事に対するくやしさを乗り越えて余りある程のイベントは、今のところありません。同じ理由でスポーツ観戦もしません。どうして自腹を切ってまで、わざわざサクラをしに行かないといけないのでしょうか。

似た理由でやはり参加したくないものに、泊まりのグルメツアーがあります。美味しいものや珍しい郷土料理を食べるのは好きなのですが、先ず人は馬ではないので1日に食べられる量には限りがあって効率が非常に悪い。その上に他人の家(旅館)に泊まっても気兼ねしてあるいは不慣れで気持ちよく寝られないし、仲居さんたちの人件費も受け持たされている。もう考えられません。せいぜい近場のデパートの催事場で十分です。

さらに同様に、お中元やお歳暮ももらいたくありません。もらっても大抵好きでないものですし、その上お返しもしないといけない。つまりわざわざデパートに足を運んで身銭を切って、結局欲しくもない物を買うのと同じことになっています。ここ数年の私の

瞑想録(その19)

自慢はお歳暮お中元もちろんのこと、年賀状を1通ももらっていないことです。年賀状は小さなことですが、ないと分かっていると気が楽で年頭から清々します。

株や投資もやりません。銀行とかの勧誘がしつこいのですが、「贅沢はいらないから毎日素うどんで構わないから二度と働きたくない」というのが私の今生で最大の希望です。たとえガードマンでもマンションの管理人でも、絶対にやりたくありません。働きたくないし、好きな時間に起きて好きな時に寝たいです。

さて嫌いなことばかり挙げてきましたが、それは私が偏屈だからではありません。と言うわけで、逆に好きなことを挙げます。昔はウォーキングやフェスタ巡りや御朱印集め等が趣味でしたが、今一番楽しいのは瞑想です。そして瞑想のテーマは、「素朴な疑問と意外な気づき」です。これをマイペースでやることはなかなか楽しい頭の体操で、思いついたことはこの一連のブログに記録してあります。エピクロス宜しく楽しいのが最優先なので、科学のような証明行為や文献引用と言った仕事は一切しません。

瞑想のネタは今まで人生をしてきて素朴に不思議に感じたことを中心に、あとは本と見聞で補います。ちなみに本も買わずに図書館を使います。物がなければ断捨離の必要もないですし、図書館だともう絶版になったような本も読めます。読む本の選択も、自分の瞑想のネタになります。

これとは別にやはりすっきりするのが、一度払った税金や代金を取り戻すようなことです。具体的には今挙げたフリーペーパー集めや図書館もそうですが、さらに見聞のための公立の美術館や博物館巡りがあります。公立は入場料が割安の所が多いので、それらを積極的に利用して瞑想の肥やしにします。ちなみに行く行動範囲は、せいぜい片道1～2時間程度の日帰り圏内です。

「九州や北海道で素晴らしい展示会がある」という趣旨のパンフレットを掴むこともあります。でも展覧会は地域性が高くないですし結構全国巡回していますので、地元ローカルに限っても見るものがそれほど平均からずれていないでしょう。そして昼食は区役所食堂や大学食堂で済ませます。これらは割安な上に全国チェーンのように画一でないので、出し物にかかわらず何気に「ご当地感」が出ます。

出かけるときは常に、マイボトルのコーヒーと紅茶を持参します。1日分の飲料をその度を買っていたら、これも結構馬鹿になりません。できれば自分の医療費や入浴代も払いたくない位なのですが、これらは仕方ないのであきらめています。物を買うときは基本的に商店街や個人商店でなく、人件費が軽くて管理ができていますスーパーを中

瞑想録(その19)

心にします。規格物しかないように見えますが、スーパーは広いのでよく探すと掘り出し物に当たり、これがまた楽しみです。

加えて①美術館等の見聞施設と、②公共食堂と、③最寄りの駅の3地点をどう組み合わせるかは、セルフメイドのプチ旅行を企画しているようで瞑想のネタとしてもなかなか楽しいです。ちなみに出かけたら駅や施設で必ずチラシやフリーペーパーを山ほどもらってきます。そしてこれらを帰宅後に精査することで、次回のツアーのための最新の詳細な情報が得られます。

最後に断っておきますと以上の基準はあくまでも私個人の基準であって、他人はおろか家族にも押し付けません。家計は一つですが、家族が浪費しようとザルのような漏れをしようと彼らの自由です。要するに私はケチではなくて、節約を楽しみとしてやっているわけです。さもないと「家族全員の節約」は発想が共倒れになってしまいますし、ケチの究極は「生まれてこなければもっとよかった」になってしまいます。

3、夢と解釈(その9)

＜夢1＞新幹線に乗るために新横浜駅にバスで着いた。するとバス停の位置がいつもと違う。そして発券場には長蛇の列ができていた。仕方ないので最後尾について前に並んでいた女性に理由を聞くと、その二十歳そここのかわいいお姉さんは、「私は近所で美容師をやっているの、良かったら今度遊びに来ない、ねえ一緒に写真を撮りましょう」などと言い出す。悪い気もしなかったのでツーショットで撮ってもらい、相席で新幹線に乗った。

＜解釈1＞こういう夢は私には珍しいです。下心とかは別にはないです。ただ「着いてみたらいつもと様子が違って不安になる」と言う夢はよく見ます。

＜夢2＞うちのマンションと隣のマンションで女の子たちが水浴びをしている。季節は夏のような。そのうち女の子たちがドミノを始めた。「勝った」「負けた」と叫んでいるとそこに隣のマンションの男の子たちが現れて、「俺たちの女を盗っただろう」などと言い出す。うちのマンションの男の子たちも出てきて、殴り合いと言うかボクシング大会になった。そうこうしているうちに空手大会も始まり、あたかもマンション対抗戦総当たりのように收拾がつかなくなってきた。

＜解釈2＞うちってそもそも「隣のマンション」と言うのがないのですよね。季節も今は冬だし、喧嘩がスポーツ大会に変わるのも逆ですよね。それに私はスポーツが大の苦手なのです。結局分かりませんでした。

瞑想録(その19)

＜夢3＞マンションの庭に私物を置いたら夜中に車にぶたれていて、管理人から文句がきたので取り返しに行った。するとそこになぜか大学時代の恩師も来ている。今まで知らなかったが同じマンションに住んでいるらしい。その先生の部屋に行ったら随分と整理されて広々としている。先生に訳を聞くと、「これから新しい本の執筆をするので不要な物は整理した」ということだ。

＜解釈3＞最近マンション敷地への違法侵入車に注意したことと、そろそろ年末(夢当時)なので色々整理が必要だという思いが合体したのだと思います。

＜夢4＞家の中で家族揃って食事をしていると、突然知らない人々が中に入ってきてあちこちの部屋や窓からの景色を勝手に覗いたりしている。特に子供たちが窓の棧に登って危ない。そうか、よく考えてみたら私たちはもうじき田舎に引っ越すのだった。私は購買希望人たちに、近所の学校や病院等の位置を教えたりした。そこに不動産屋がやってきて小物をくれ、「遅くなりました、名刺が切れたので名前を書いていきます」などと言う。

＜解釈4＞私は生まれ故郷にろくな思い出はありませんし原住地の横浜で生を終えたのですが、年を取って階段も上がれなくなったらわがままは言えません。もともと前後不覚のぼけ老人になってしまえば、どこに住もうと同じですよ。

＜夢5＞有効成分を取り出す抽出化学実験をしていた。先ず物質をアルカリ溶解して、溶解しない繊維や不純物を沈殿分離し、続いてその上澄みを酸洗中和して乾燥させるという手順なのだが、何度やってもどこかでとちってしまっちともうまくいかない。簡単なことなのにどうしてもだめなので、嫌々してイラついてきた。

＜解釈5＞いわゆる科学的手続きでは真の本質は取り出せないという真実を、体で感じているのだと思います。

＜夢6＞出勤のためにバイクに乗ったが、どこかで道を間違えてしまい反対方向の横須賀に着いた。バイクも動かなくなってしまった。仕方ないので海辺の家に上がり込んで会社や家に電話をしようとしたが、電話番号がどうしても思い出せない。その家は築3年とのことだが、不動産屋が来ているのでどうも売りに出すらしい。私が困っていると、その家の人たちは私のカバンに入っていたヒンズー教の祭具を珍しそうに見ている。私がそれらの説明をすると、「もう昼だけど用は済んだの」と急かされた。

＜解釈6＞要するに会社に行きたくない、仕事をしたくない、趣味に遊んでいたいと言う願望でしょう。

瞑想録(その19)

<夢7>「サスケ、秋葉大権現のアバターになれ」と言う声が天の方から聞こえた。どうやら私はコードネーム「サスケ」と呼ばれているらしい。その声の主は決して姿を現さずにただただ、「秋葉大権現のアバターになれ」と繰り返すのだった。

<解釈7>何気に芝居じみしています。最近能や戯曲の作品を読んでいるからでしょうか。

<夢8>隣の研究室が体育館で公開実験をやるといので、見に行った。すると宇宙戦艦ヤマトの波動砲のような大きな筒がたくさんあってあっちこっちを向いていて、これで宇宙の意識の波動を測定するのだという。それらの筒はぐるぐる動くので危うくぶたれそうになったりしたが、宇宙の意識を捕捉できたか否かは分からなかった。

<解釈8>正直に言って予知夢と言うか、正夢のような気がしました。

<夢9>真っ白なウサギを飼っていた。自分だけで飼っているというよりも、私はまだ小学生でクラス全員が飼っているという感じだった。ちょうど映画「豚の居た教室」みたいな感じが、夢ではウサギは食べないけど。私は本来のところ面倒見が悪い人間なのだが、今回はなぜか私が一番熱心に餌をやっている。

<解釈9>多分ウサギは嫁様で、妹代わりにしているのだと思います。

先日の議論で「人の気づきは脳波の波動同士の干渉効果ではないか」と指摘しました。夢と言うものは覚醒時にはおよそ関係しないような遠い波動が実は近くて、意外なところで干渉した結果だと思えてきました。

4、三島と寺山に見る言葉

三島文学は正面から取り組むとなかなか難解だが、その主な理由は私を含めた凡人が三島の天才的気付きに感情移入できなくて、結局意味が分からず投げ出してしまふからだ気づいた。その投げ出し方はいかに、微積分が理解できずに投げ出す文系学生のような。つまり三島の心象の絢の切り出し法は、実は微積分ほどに切れ味が良いのである。これは彼のすべての書き物に遍在しているが、以下に一例を挙げる。

(引用)誠は父親の財産のうちから十五万円をあてがわれていた。毅(父親)はこの有望な息子に、財産管理の手習いをさせようと思ったのである。毅が例の流儀で「黙って」これをあてがっていることが、誠に重荷を与えた。父親の思わせぶりの沈黙は、儒教的なはにかみから来るもので、これは出来の良い息子から道徳的に利潤をせしめるのに好都合な方法である。(「青の時代」第9章より)

川崎誠はこの小説の主人公で、千葉県木更津市に地元でも名士で医者 of 川崎毅の息子である。この一節は戦後の混乱期で誠は東大法学部に復学して成績も芳しいが、子供のころからの細心と二重人格の混じった性格が治っていない。また頭脳明晰なゆえに、父親の俗人さ見破って嫌っていた。誠はいわば優秀さが許した、永遠に成長できない精神的かたわである。この後誠は15万円を基に学生のまま高利貸しになって、世の中を実体験しようとする。

この一節でまず難解なのは、①「なぜあてがいが重荷か」だ。普通は紐なしで返金不要の金は嬉しいものである。この一節は誠が父親を嫌いながらも逆らえず、用途について難じられると精いっぱいの言い訳で自分を正当化しないと気が済まない、捻じれてプライドが高い性格であることを読者に向けて描写している。性格をストレートに言わずに逸話で暗示するのが、三島のやり方である。ちなみに三島はここで、事件小説を巧妙に性格小説に変換している。

次に難解なのは、②「儒教的なはにかみ」である。父親は昔の人間で教養もあるから普通に儒教的であるが、儒教的なはにかみとはどういう気持ちであろうか。はにかみとは恥ずかしがることであるが、この文脈ではその恥ずかしがりやが儒教に準じていると言うのだろうかそれとも反していると言うのだろうか。思うに父親毅は息子の誠の高学歴と好成績を内心自慢しているが、この優越感は儒教の仁義礼智信の謙虚さとは合致しない。しかし毅はそれでもなお優越感を捨てられず、その裏返しとしていかにも儒教的な風で広い心を演じており、内心多少忸怩したままのその心を誠に見抜かれているということだろう。

最後の疑問は、③「思わせぶりの沈黙はこれがなぜ息子から道徳的に利潤をせしめるのに好都合な方法なのか」である。これは、毅は毅で息子の弱点を見抜いており、沈黙が息子を手玉にする最上の方法だと知ってほくそえんでいるのである。そして誠は父親のほくそえみをも見抜いていてかつそれに逆らう方法を知らず、そのために父親や金がおのこ重荷になっているのだ。

なおこの一節の後に誠は、自己合理性を完結するために好きでもない女性を落とす目的で十五万円を五十万円に増やそうと、「社会勉強」と言う自分に対する言い訳で高利貸しと言う悪の道に手を染め、最後は返済できなくなって死と言う手段で悪の美を完成させる。この辺の盛り上げ方もいかにも三島風である。

瞑想録(その19)

三島のことを「分かりやすく説明できないバカ」と評する向きもあって、これはこれではなかなか良いところをついている。だがこの評価はあたかも「役にも立たない微積分をさもたいそう風に教える数学教師のバカ」と言っているのに似ている。実際の所三島は彼の感性と心象を表現するのに、ただの一言も無駄をしていない。三島が本当に書きたかったのは、実は自分が持っていてどうしても取れない精神的なカタワの生のありようであった。そのためにこの「光クラブ事件」を都合よく利用したわけである。

さて、三島がいわば「心象発掘の鬼才」とするならば、彼と同時代でやはり言葉の天才に寺山修司がいた。かれを「三島のライバル」と言う人も居たが、両者にライバル心はなくまた目標や得意領域も微妙に違っている。寺山はあえて冠をかぶせるなら、「言葉の錬金術師」とでも呼ぶのが適切であろうか。

寺山は俳句、短歌、詩、小説、戯曲、歌詞と言葉のあらゆる分野で発散するほどの活躍をし、特にサブカルチャーの分野の草分けであるが、彼の代表作に「書を捨てよ、街に出よう」がある。私はこの作品と「寺山初期戯曲集」を読んでみたが、サブカルの方がメインカルチャーを押しつけて文化の中心になっている今の時代から見ると、私は彼に今一歴史的価値しか感じなかった。もっとも没後30年経った先年にも回顧展が開かれたほどであるから、私が理解できていないだけで現代的価値もあるのだろう。

今挙げた「書を捨てよ、街に出よう」、これはこれだけで十分に文学と言えるほどの感動的なフレーズで、錬金術師の面目躍如である。もしCMのキーワードだったら、間違いなく賞を取っていたであろう。ただこの本の具体的な内容は一言で言うと「裏社会ほど真実で面白い」と言う当たり前のことを、娼婦ややくざの例を取って説明しているものであって、私にとっては題名だけの方が幸せであった。諸戯作も本人が「実験演劇」と言っている通りであって、実験としては物理や化学の実験よりも面白くて完璧だと言う印象であった。ある意味彼の開いた路線が、現代では彼の努力と成果によって十分に咀嚼されているということであろう。

例として「書を捨てよ」から一節を引用する。

(ほぼ引用) 一本の木にも流れている血がある。木の中では血は立ったまま眠っている。眠っている血もいつかは目を覚まし木の歴史を訊ねる。歴史の一切は幻滅にしか過ぎないので、木は自らを切り倒す斧の軸になるしかない。

こちら三島とは筋は違うが三島に劣らず、分析と表現が完璧である。

私はむしろ寺山の初期の短歌(上の2本)と俳句(下の2本)に注目する。

・マッチ擦るつかのま海に霧ふかし 身捨つるほどの祖国はありや

瞑想録(その19)

- ・一粒の向日葵の種子まきしの中に 荒野をわれの処女地と呼びき
- ・花売車どこへ押せども母貧し
- ・便所より青空見えて啄木忌

これらはいずれも二十歳のころの作である。これら彼の短歌と俳句を見ているともちろんこれが二十歳の作としてはその感性と完成度の高さに驚くのであるが、これら一連の作品ほど私に「俳句は短すぎで短歌は長すぎ、かといってその間だと調子が合わない。世の中なかなかうまくいかないものだ」と言う某著名文学者の警句を納得させる作品群もない。短歌の後半を切り捨てて俳句に付け直すという思考実験をすると良く分かる。この寺山に関する思考実験は、三島の微積分と同じほどに数学的である。

本日は著名な文学作品を例にとって、文学や文章は時に数学ほど厳密で繊細で構造的になれることを見ました。

5、理解の進展と脳波動

脳によるモチーフ理解の順序とそれに伴う脳波動の形成過程について、本日は瞑想します。理解対象としては「1枚の絵」の場合が一番分かりやすいので、この例から始めます。

以前にも指摘しましたが人が1枚の絵を見るときに、①そのトーンや色調や勢いと言ったアナログと、②形状等の当てはめに依る意味のデジタル理解の、両方を同時並行的に行ったうえでその合成で全体のモチーフの理解に至ります。言ってみればその絵の放つ情報を、デジアナ同時に感得するわけです。

その感得の具体的な手順をもう少し細かく、段階を追って分類します。①網膜に依る全部のピクセル的捕捉、②デジとアナそれぞれに依る特徴抽出、③デジアナ統合によるモチーフ理解、④枝葉の切り落としによる成形(「基本+バリエーション」の分解)、⑤言葉による近似表現、の順となっています。

この内描き手の意図した「心象」が見る側に「波動」として伝わるのは、②の特徴抽出の段階からです。全体理解なので分析と反対の総合的建設的理解です。①の時点では単に機械的なビット転送しかありません。また②の段階では波と言ってもかなり凹凸があり波動も1本にまとまっていなくて、言わば「前理解」と言う感じです。それが③の段階でかなり整った波動になります。

瞑想録(その19)

③の段階で波動が規格化されるのは、②の時点の粗い波動からマイナーな凹凸を取って成形されるからです。但し波本来の干渉やその表れである気づきは、むしろ②の段階で発生します。これはいわばアナログ集合に特有の、単なる足し算でない相互作用に当たります。この干渉の演算の構造を明示できれば、それが脳に特有の記述言語になるわけです。

③の段階に来ると一段落して、「全体のモチーフが分かった」と納得する時点になります。波としてもかなり整っているし、基本的に何の絵か(人か景色か抽象画かと言った大まかなくり)も、一言では言えないもののほぼ整理されています。

つまりここで一旦、整理作業と言うか理解作業が一段落して、それ以上時間をかけてもことモチーフについてはさほど理解が進まない「安定状態」(プラトー)になります。これが「理解した」と言う感情を生成して、見る人を安心させます。本能のレベルで言えば、対象が自分に危害を加える物でないことを納得するわけです。

④の段階はさらに言葉にする準備や自分の心象空間における位置づけが行われ、⑤の段階では感想を言葉にして他者に伝えることもできます。ここで注意すべきは①から⑤に進むにしたがって順次、波としての整理はされますが情報と言う意味では、あくまでも主要部分のみにするという高密度化を目指すものの、その量は段階を経るごとに大きく減少していくということです。

ですからこの手順は非可逆的で、例えば③の段階のみの情報から元の画像を再構築することはできません。⑤の言葉な段階では、情報はほとんど残っていないと言った方がよいでしょう。そして人の脳とは良くできたもので、少なくともしばらくの間は、③段階の理解に至っても①段階の画像を並行して記憶しています。その証拠に、少し前に聞いた音や見た景色をしばらくの間は思い出せるでしょう。

個人的経験ですが最近ある画廊に行ったときに、一通り見た後に画廊主から「ここは音響も良いので舞台としても使えます」と言われました。そしてそれまで音響と言う観点が全くなかったにもかかわらずその画廊に来てからを一瞬で回想して、「あ、なるほど」と納得したことがあります。このようにしばらくは「そのまんま」で、無意識に記憶に入っているのです。

さてここで見る対象が1枚の絵でなくデパート全体とか言うように対象が広いと、同じく視覚でも何十枚もの場面を一々内省理解した上でこれらを全体に継ぎ合わせて1つ

瞑想録(その19)

の理解とするという、より複雑な工程をたどります。当然のことながらモチーフ理解により多大の手間と時間を要します。

そしてこの手間がかかるのが初めから当たり前なのが、小説等の文章理解なのではないでしょうか。文章理解に手間と時間がかかるのは文章が、あくまでも著者側の一方的判断であるという片手落ちはあるものの、そもそも要点のみを記述していて、枝葉が初めから落ちている分だけ複雑な構造が提示できるからでしょう。

例えば文章で会話のやり取りを記述しているときに、手や足の位置に関する記述は通常ありません。これはそのタイミングに手足がないあるいはまるで動いていないのではなくて、仮に動いていても話の流れに重要でないから落ちているのです。ですから逆に文章を基に絵をかくときには、その部分を適当に補ってやらないといけません。

このように情報の在り方と言う意味では文章と絵画は対照的な位置にあり、そしてどちらも完全でない以上は絵巻物と言う字と絵の混合物が相互補完的であり、一番立体的で優れているということになります。新聞の連載物でもほぼ必ず挿絵が入っているでしょう。

ちなみに情報量をビット数で言うと、絵の方が断然に大きいです。これは画像をMSワードに張り付けると、急に重くなることから分かります。文章の方が情報量に比べて理解に骨が折れると言うことは、こと情報量について現実には量だけでなく濃さ(密度)の要素がかかわってくると言うことでしょう。

ところで細かい絵を描くには相当の努力と手間が要るけれども、見る側は多分にそれを「細かい絵だね」の1情報で済ませてしまいます。このために荒い絵と細かい絵でほとんど理解の時間が変わらないという、一種の矛盾があります。他方で文章では、こう言う非対称性はあまり高くありません。

そして絵と小説の鑑賞時間を比べると、「どうしてそんなに手間暇をかけてまで長い小説やドキュメントを読む気になるか」と不思議になってきます。これは結局、それらの手間に見合った細密な情報や喜びが得られると言う見返りがあるからです。そう言うご利益を感じない人は、週刊誌を買ってもグラビアしか見ません。

再度繰り返しますとアナログ空間と言う次元や線形性のない空間とは、結局波動たちが形成し相互作用する空間であるということになります。そしてここでの演算の構造が分かれば、それが脳の記述言語となることでしょう。

6、良い年の取り方

本日は爺さんくさい題名だが、私は実際のところまだそこまでの老人ではない。本日は将来への自戒も含めて書いている。

良い年の取り方とは最終的に、臨終の間際に後悔のない人生だ。つまり人生の大きな部分を、「間違えた」とか「二度とやりたくない」と思わない人生だと心得ている。だから良い年の取り方には、①自分の目標に向かって進むこと、②他方で人生の相場を知ること、の相反する2要素があって、その調和点を見出だすことになる。要求ばかり非現実にもた分不相応に強ければ、人生の満足などおよそあり得ない。

先ず私は人生を、①現役時代と②完成時代に2分する。そしてその分岐点を、通常の会社での役職定年あるいは子会社転籍年齢とする。現状では55歳くらいか。自分の意思の効く人生が20歳で始まり80歳までぼけずに生きるとすると、現役時代は35年で完成時代は25年となる。どちらも大きな仕事の2つや3つ十分にできる長さだ。

役職定年を目安に2つに切った理由は、①世の中の大きな流れが45歳くらいを能力のピークと見ていることと、②大企業すらどんどん倒産やリストラをやるこの不確定な時代に55歳までどんな形にしても現役ができたと言うことはもはや当たり前でなく十分にありがたいことだからだ。加えて人生の成否の究極は「どういう完成をするか」の一点にかかっているので、完成期を長めに取った。

現役時代は仕事に打ち込むのも趣味に打ち込むのも、状況や選択が許される限り結構なのだ。ただ現役時代には、日本や世界の行く末や世の中の理想の在り方と言った、広くグローバルな視点を持って欲しい。その成否に一喜一憂することにより、何らかの形で人類と言う大集団をけん引するモーゼのような気概を持ってほしいと言うことだ。そう言うことも、本来目標である完成時代の肥やしになる。

現代の世の中は試験に次ぐ試験だ。高校入試や大学入試はもちろん、二十歳を過ぎて大人になってからも院試とか就活とかあって、まるで人生すべてが予備校であるかのようだ。半期ごとに成績もつけられる。こういう慣習は必要悪で、人を小さくする一種の社会悪だ。なぜなら試験とはその分野の基本的な記憶の程度を測る、つまりどれだけ「既存の型にはめられたか」で優劣をつける。創造性と正反対に実は極めて卑屈で非人間的で、人を小物にするだけの道具だ。絵画等芸術では公募展が登竜門になるが、これも多分に試験官が審査員に代わっただけで体の良い競争である。

瞑想録(その19)

もっとも最近の若い人を見ると彼らは彼らでうまく順応して試験慣れしている。バイトの採用面接等でも「当たるも八卦当たらぬも八卦」程度にゲーム感覚でやっていて、落ちてても大して気にしない。まあこれも時代に逆らわないで合わせる、一つの順応の仕方だろう。若い人にも学ぶところはある。

私個人について問われれば、私自身は経済力や名声を全く気にしない人間なのだ。評価から離れたところで最初から競争に参加せずに、自分勝手に黙々とやってきた。隠遁者の境地が最高だと思っている。会社で偉くなりたい人は「責任をうまく回避する」とか「他人の業績も取り上げて自分のものにする」とかそういった要領が必要なようだが、私はその詳細を知らない。

人から学ぶあるいは社会から学ぶことは結構あるので、最低10年くらいは軍隊の代わりだと思って会社等に勤めて、給料をもらいながら社会勉強をするのは価値がある。その際に嫌でも俗人と最低限の付き合いをしなければならない。だが深くかかわると面倒なことが多いので、会社に野心がないならば付き合いは最低限度に抑えるのが賢いと思う。

具体的には、①存在を消して目立たないようにする、②能ある鷹になって爪を隠す、③のらくら返事をして「はい」と言ってやらない等だ。使えない奴だと思われれば、仕事も来ないし足も引っ張られない。要するに老荘思想の実践だ。上司に「何か質問はあるか」と聞かれても決して誘導に乗らない。乗って聞くと否定されて範囲が狭められて、次回の言い訳に使えなくなるからだ。親戚付き合いも面倒だが要領は同様で、かつ会社で習得した逃げ技はこちらで応用することで活かして元を取る。

次に肝心の完成時代だが、今の日本は①近隣諸国の嫌がらせとか、②政治や官僚の腐敗とか、③カジノができそうとか、④ブラックな仕事が多いとかいろいろ問題はある。だが壮年期を超えて人生の収穫期に入ったら、これらの「間接的な」問題はすべて若い人々に任せて忘れるのが善だ。こういう茶飯事は大小毎日あるが、いくら一家言を言っても犬の遠吠えで、発散するだけで暇つぶしと変わらない。自分は自分に直接降りかかる問題のみを最小限の努力で避け、むしろ完成に向けて泰然自若と日々を楽しむのが正しい生き方だと思う。

こういうやり方は決して責任回避ではない。自分は雑音から遠ざかって人生の総括に入るのだ。具体的にはそれまでに温めていたアイデアがあるなら、その実現に向けて動き出すのが良い。そういうものがない会社人間はこれ自体不幸なことだが、仕方な

瞑想録(その19)

いので知り合いや嫁様について自分探しを始めることだ。家好きな人は多いので自宅や別宅をDIY式に自力で建てても良いし、八十八か所巡りとかありふれたことで始めても良い。あるいは労働に未練があるなら損失覚悟で会社を興すのも、その人の自由だ。起こした会社がつぶれて損を出しても、一応納得できるだろう。

私は完成時代にやりたい目標があるので困らないが、これから探す人は一般的に単に自分が楽しいことよりも多少なりとも人の役に立っている地域のボランティア等の方が定着しやすいようだ。80歳までに25年もあればかなり大きなまとまった完成ができる。やりがいを持っている人ほどボケにくいという話もある。

そしてほぼ完成するか完成まで行かなくてもやりがいがあったと振り返れるならば、それが最高の人生だ。人生は社畜では終わらない。これが基本である。

7、「最驚！ガッツ伝説」を読んだ

諸発言の主のガッツ石松さんはご存知の通り、元ボクシングチャンピオンで今はタレント業の有名人です。本人なりに余裕でまじめに生きて、フツーに息をしておられます。この人の持ち味は「まじめな言行がそのままボケになっている」ことです。元から学業優秀とは程遠かったのですが、それがパンチドランカーで磨きがかかって、何気に南洋の土人の酋長のようなオーラを放っている人です。

以前この人がタレント業に転向した頃の頃に、「ぼけてみてください」と言う番組がありました。ガッツさんは孫の手をもって何か面白いことを言う番だったのですが、「これは何だ」といぶかしがって回したり頭の上に載せたりしているだけでした。要するに「ボケる」と言うことの意味が、まるで分かっていなかったのです。「この人これでこの業界でやって行けるのだろうか」と、他人事ながら心配になったものです。

でも結果的に、この心配は杞憂でした。この人は地でやっていることがそのまま自然に面白いという、天然記念物的に稀有な性格の持ち主だったのです。この人はいわゆる精神薄弱児ではありません。漢字も書けるし足し算もできる、まあ通常の生活はできるわけです。多分「住んでいる宇宙が我々と違う」と言うことでしょう。

笑いは脳の作用のうちの典型的な物ですので、アナログの見地から「ガッツさんはなぜ面白いのか」を瞑想のネタにするために、題記したガッツさんの「名言集」を読みました。以下にそのいくつかを例示します。ありがたいご託宣ばかりですよ。

瞑想録(その19)

・ガッツさんのサインは「ガッツ右松」、相模女子大学は「女関取養成所」
ガッツさんは実はかなり漢字が読めることが、この例で分かります。しかも論理的順序的でなく、ビジュアルに見ていることが分かります。ここで面白いのは、間違えているとはいえ漢字が漢字でなくなっているのではなくて、取り違えてはいるものの依然として漢字であることです。加えて「女相撲養成所」などおよそあろうはずもないのに、こちら側から自分の読み間違いを点検しようという「総合的バランス発想」が抜けているようです。

・「ボクシングに出会って人生が380度変わった」
「360度」と言うのは、なんとなく頭にあったみたいです。惜しいですね。司会者が「惜しいですね」と言うと、「あ、20度足りなかったのか」、普通人生の逆転と言うと「半周の180度」なのに、「1周でそれは400度」だと思っている。一応引き算はできているみたいです。

・「クリスマスは誰の誕生日でしょう」に対して「七面鳥！」
一応連想ゲームとしては合っていますがこの答え、本人は気づいていないでしょうけどブラックユーモアですね。素直に笑えません。そういえばうちの近所にも「メリーさんの羊」と言うジンギスカン屋があります。

・「鎌倉幕府のできた年は？」に対して「ヨイクニだから4192年」
「いい国作ろう・鎌倉幕府」と言う語呂合わせは覚えていらっしゃる。これは驚異的にすごいです。でも今年が2017年で4192年はるか先だという発想がまるでない。不思議なバランス感覚、脳構造です。もしかしたら縄文人達はどうだったのかもしれませんが。

・「トンチ問題です、 $1+9+3$ は？」に対して「12」
正解は「一休さん」、トンチだと言っているのにまじめに足しています。性格がまじめと言うより、単に応用力や柔軟性が少ないのでしょう。もっとも足し算は微妙に間違っています。

・「赤ちゃんを入れるものは？」に対して「コインロッカー！」
これもかなりブラックです。ここまで極限的にぼけた答えは、出川哲朗でも無理でしょう。確かにコインロッカーベビーは一時問題になりましたが、ガッツさんの場合は「その日の朝にたまたまTVで見た」とかそういうきっかけでしょう。

・「健康が大事だとか言いますが、一番大事なのは体ですよ」

瞑想録(その19)

この発言もガッツさんのまじめにとぼけた脳構造を、如実に表しています。ガッツさんにとって健康と体は全くの別物のようです。もちろん「精神の健康もある」という分析は可能なのですが、ガッツさんに限ってそんな深い意味があるはずがありません。

・「太陽はどっちから出るでしょう？」に対して、「右からに決まっている！」
ガッツさんの的にはそう見えるのでしょうか。確かに方向の相対性とか、ソフィスティケートされすぎた現代人の悪い習慣に見えてきます。

・時代映画の撮影の後で、「江戸時代の人たちって大変だったのだな、毎日こんなに重い物を被っていたのかよ」
そんなわけないでしょう、それは撮影用のカツラです。でも本人は至ってまじめです。

ガッツさんは脳の自然な発達の仕方について、数多くの貴重な症例を提供してくれています。それは、①人は先ずビジュアルでアバウトに認識する、②事物には印象に残ることとそうでないことがありその基準は重要度ではない、③現代人は「知のお行儀」に毒されており昔の人や未開人の方がはるかに芸術的だった、④人を安心させる丸い人柄が言行や理屈よりも重要だ、等です。未来人間や宇宙人のエリートから見たら、現代人もガッツさんほどにまじめに笑えるのかもしれませんが。

ただガッツさんの場合は先天的に明るくて、杞憂とか先の心配とかそういう暗い面が全くない。「死んだらどうなるのだろうか」とか「車に轢かれて頭が治っちゃったらどうしよう」とか、そう言うこととはおよそ無縁です。これはもう人徳と言うか悟りと言うか、得な性格です。見習いたいほどです。

最後にガッツさんではないのですが、たまたま同時に読んでいた「説得・エホバの証人と輸血拒否事件」から、その著者とその麻雀友達との会話です。

著者「あの連中って輸血はご法度なのだよな」

友人「なんでだよ」

著者「エホバが駄目だって言っているからだよ」

友人「誰だ、そのエホバって？」

著者「全知全能の神様だそうだ」

友人「そのエホバって奴さあ、全能かもしれないけどIQは低いじゃない」

無関係で無教養な俗物の方が返って分かっていて、図星だったりします。

8、メガ重電の凋落

＜ブラック企業の本質＞

題名からは回りくどくなるが、本日は前半でブラック企業(バイト)の根源を見る。ネット商店等の個人商売をやってみると分かるが、人から金を取るというのは大変なことだ。見知らぬ一般大衆から金を取るのだから、中にはクレーマーもいることだろう。もっとも商店街の個人商店などは弱気な客への粗悪品の売り付けなど平気で、いわばキツネとタヌキの化かし合いだ。どっちにしても心臓に毛が生えていないとできないことで、商売は人を悪くする。

ところで貨幣の存在の原点は物々交換だ。つまり貨幣は交換の潤滑油的な裏書のようなものだ。そして人々や会社は歳入貨幣を増やすために技術開発や売り込みをする。さてここで思考実験をしてみよう。内輪の売り買いしかない閉じた場末の商店街は、そのままとめて消滅しても誰も困らない(ゲージ不変)。そう言うと寂れた商店街は極めて無意味な存在に見えるが、地球全体を見ればこれも閉じた系であって場末の商店街と変わらない。

自然の恵みの採取を基本に売り買いをし合って、その裏書として引き換えに貨幣が流通して経済行為が成立している。と言うことは世界全部が用意ドンで抜け駆けなしに技術開発をやめようが週休4日にしようが、いわばその条件下で固定均衡したままに平衡的に経済は回り続けることになる。経済や貨幣が回らなくなると言うことは決してない。あくまでも現状維持で永遠に回り続けるのだ。

だったらこれで良いではないか。もちろん社会が停滞すると世の中が中世暗黒時代のようになるという副作用はあってこれは困るが、ゆっくり休めることとのトレードオフだと思えば必ずしも悪と決めつけられない。「金は天下の回り物」とは良く言ったものだ。

さてここで収入から必要経費を差し引いたものが収益だ。だから例えば必要経費の割合を3分の2とすると、社員をこき使って収入を1割増やただけで収益は3割も上がることになる。これがブラック企業の端的な構造だ。そしてブラック企業は結局何を食い物にして自分の収入を増やしているかと言うと、それは数字にならない社会全体の余裕、言わば安全係数みたいなものだ。

だからブラックのしわ寄せは結局社会構造に来て、社会全体に余裕がなくなる。日本古来の譲り合いとかおもてなしとかそういう美德のなくなった、全くドライのハゲタカ競争社会になる。もちろん競争は生産性の基本なので、なくすと共産主義のように非現

実になってしまう。しかし事物には「限度」とか「ほどほど」と言うものがあって「過ぎたるは及ばざるがごとし」なのだ。つまり競争もむやみやたらではなくて、本来は手加減や常識が必要なのだ。一言で言うと「足ることを知る」と言う反対格言も同時に重要なのだ。この理屈は誰にもわかるが、実行は難しい。

特に最近是人々の権利意識が高まって、税金の無駄遣いや経営失敗による株価下落があるとすぐに問題化する。より根本に帰って、余裕やおもてなし等の日本古来の余裕はなぜなくなったのか。これらの美德には、「1日待てば回りまわって倍の利益が自分の所に戻ってくる」という無言の前提がある。ところが日本もグローバル化してみみっちくなり、「今日の10円を辞退すると明日は100円になるかもしれないがそれは他人にかっぱられる」が現状になった。これで謙譲の美德とかしていたとしたら、むしろ単なるアホだ。

<重電の凋落>

前段階で述べた「社会資本と言う見えないものの食い物化による消滅」は、おもてなしだけではなくモノづくりの精神にも深刻な影響を与えている。一昔前までは町工場にも重電会社の現場にも職人氣質が居て、損得抜きで良い物を作ろうという気概があり、これが「日本品質」を支えていた。ところが今の日本は現代経営と称して、この職人氣質と言う社会資本も食いつくしてしまった。「譲ったところで他人に取られるなら今自分で食ってしまおう」、現代はもはやこういう根性でないと経営者になれない。

特に最近目立つのが大手電機業界の不振だ。ダメ筆頭の東芝は、バカのババ掴みで底なしの泥沼だ。これも「技術者は職人魂や正直を捨てないと経営層に入れない」などと言う都市伝説を真に受けたバカたちが、経営層に座ったせいだ。だがこの調子でダメなのは東芝だけではない。

日本最大の企業グループの三菱グループ、三菱重工も①大型船建造は不良だらけで撤退、②国産飛行機は大きく納期遅れで商売にならない、③米国の原発用熱交換器でチョンボして1兆円近い賠償請求、加えて④元は三菱重工自動車本部だった三菱自動車は不正が原因でグループ外に身売りと、実はかなり危ない。

かつての手先の器用さと誠実さを生かした日本のモノづくりのポテンシャルが、根底から食われて根腐れした結果だ。昨日まで町工場で熟練工だった人が過酷なノルマで粗製乱造に走るとか、逆に仕事がなくなってホームレスになるような時代が象徴している。もはや日本のモノ作りに「良い仕事」と言う社会資本は消滅していて、これが回りまわってメガ重電のチョンボにブーメランしているのだ。

3メガ重電のうちの最後で、「ここだけは堅実で大丈夫」と思われている日立製作所も、三菱重工と組んだ南アフリカの火力発電プロジェクトで8000億円の損失を出して三菱重工に損害賠償請求の訴訟を仕掛けられている。おそらく弁護士同士の話し合いにより折半で示談して訴訟をとり下げるのだろうが、社会資本が食いつくされた現在で「日立だけ安泰」と言うことは考えられない。むしろ単に失敗がまだ表面化していないだけではないか。

今や3メガ重電が生き残りをかけて、なりふり構わず共食いをしている感じだ。10年前に小泉首相と竹中平蔵が「日本にメガバンクは1個か2個で良い」と言った時に、合わせて「日本にメガ重電は高々1つで良い」とも明言してくれれば良かったのかもしれないが、今やこれを現実的に調整しあっている感じだ。

この仁義のない時代での「明日の100円より今日の10円」主義で結果的にパイを減らして自分の首を絞めている構図、これは「囚人のジレンマ」と全く同じ構造だ。と言うことはナッシュ均衡の形で縮小均衡を目指す羽目になっているということである。そしてナッシュ均衡はブラウアーの不動点定理という強固な定理と同値であることが知られている。いつどのように落ち着くのであろうか。もはや「大企業に入ってしまうと一生安泰」などない。

9、思念不能と波動

現行の理工学やモノづくりは式に表されること、つまり立式可能性を前提に構成されている。これはまあ考えようによっては当たり前のことだ。絵画や文学や法律は式にならなくてもできるが、モノづくりは安全性や復元可能性、それ以前にそもそも制作可能なことを評価できないと作れない。そしてそれらの評価は数値に依るからだ。

ところで最近は計算機の進化によって、式にならない事象も解けるとまでは言えないが可視化はできるようになってきた。セルラーオートマトンに依る渋滞予測がその典型だ。この手法は車の1台1台を同一の点(球、セル)に単純化してモデル化する。その上で各セルに同一の「動きの法則」を与えて、計算機によって動かしていく。するとどういった場合に渋滞が起こりやすいかを見ることができる。これは立派に可視化であり、再現性もあるので科学である。

もちろん一般的には混んでいるほど渋滞しやすい。だが厳密には混み方とか運転の仕方によって、同じ渋滞密度でも実際には渋滞したりしなかったりする。さらにちょっと

した工夫で渋滞の程度が違ったりして、これらの知見が実用に役立つ。典型的な場合には「渋滞発生 of 臨界点」も求まるだろう。だがその臨界点や渋滞発生 of 詳しいメカニズムはこの手法では分からない。式の場合と違って微積分とか求解変形ができないからだ。その意味ではセル法は、理論より実験に近い。

ではセル法は一般に、立式よりも劣った方法なのか。これが必ずしもそうとは言い切れない。立式も同時に可能な問題ならば、セル法は高々可視化の補助ツールに過ぎない。だが立式不能なほどに複雑なあるいは平滑でない問題にも、セル法は使えるのだ。だから適用範囲と言うことになるセル法の方がはるかに広くなり、立式可能性はその一部分にすぎないことになる。高校までに習う数学は明快だが狭いのだ。

さらに言えば立式できても求解できない場合も多い。積分関数が存在しないとか高次すぎて求解できないとかだ。その意味では立式可能性のさらに狭い内側に求解可能性と言う世界があって、これは理想ではあるけれども極めてまれで宝くじに当たるほどラッキーな場合と言うことになる。そして従来の数学はこの部分のみをいじっているきわめて特殊な学問であって、決して普遍的でもなければ人の認識の中央にもない。

では逆に広い方に注目して、考えを広げていこう。「セル法が認識最大か？」と言うと、セル法であっても可視化できない範囲は、実は広大にある。具体的には小説や法律や論理や思想のように文章でしか陽に表せない世界だ。セル法は基本が球でデジタルなので、順序しかない事項や論理しかない事項は原理的に表現できない。だからセル法の可視化可能性の世界の外に大きく広く、単なる「表現可能性」と言う世界が広がっている。この世界に至るともはや、証明と言う納得手段が意味を持たなくなってくる。

ここで表現可能性は可視化可能性よりもはるかに広大であるが、セル法のような具体的態様の可視化や臨界点の導出はできない。その意味で先から順次見てきたように、「より広い＝より分析不可能」と言う、ある意味人の脳力や手法や思考の限界を示す一定の法則が見えてくる。

例として経済学を挙げよう。経済学とは富と言う数字に関する学問である。そして近代経済学は計量的であり、これまでの議論で言えば立式可能性の範疇に落ちる。他方でマルクス経済学は数字に関する議論でありながら、表現可能性の範疇にしか落ちない。だから当該学問の正否は別として、計算できる近代経済学の方が本当の経済学であるかに見えてくる。だがこれは現在時点で計算機と言う計算道具が異常に進歩しているからである。逆に近代経済学には哲学や思想がない。

また私が以前から指摘している「アナログの典型としての波動」も、セル法の及ぶところではない。波動は球やその単なる集まりではないからだ。波動とは「意志の伝播と波動」と題した記事で絵により例示したような、何らかの意味での「波打ち」を持ったものだ。だがこのような「パフ波」や「スクリー波」だけでなく、「単発波」も情報やエネルギーを伝えていれば波である。このような複雑かつ不定形な波は、もちろん立式可能ですらない。だから真の波動は立式不能ゆえに事実上科学から除外されていて、理解が遅れている。同様に波動力学も理解不十分だ。これらは定量表現や証明と相入れないからだ。

さて、それでは「表現可能性が人の脳力の最大領域か」と言うと、実はその外にさらに「思念可能領域」がある。これは絵を見てモチーフを理解した時のように、感じは理解できるつまり思念できるが表現するとか他人に伝達するのは容易ではなく少なからぬ近似を必要とする、もどかしい世界である。この辺はそろそろ密教の世界に入ってくる。またこの範疇に落ちるアナログ波動も多い。

そしておそらくこのさらに外側には、思念不能と言う世界が広く広がっていることだろう。理解すらできない、手掛かりすらないのである。例えばある種の漢方薬は「なぜか分からないけど結構効く」と言う理由で用いられているが、この「なぜか分からない」感じである。実は人の心象世界の最も広いところと言うかほとんどがこの思念不能世界ではないかと思っている。思念不能だからもちろん表現などできず、ましてや立式や求解など言わずもがなである。一種のダークマターだ。

それで結局のところ、求解可能性という例外的に極めて狭い世界で、あたかもそれがすべてであるように蠢いているのが科学と言う代物だとしたら、我々は一体どうすればいいのか。思念不能な世界も強引に立式可能にすることがむしろ世界中を一神教にしてしまうに等しい暴挙だとしたら、我々にできることはアニミズム宜しく四季自然を全身で感じることの重要性に謙虚に立ち戻ることではないか。

10、「家族喰い・尼崎連続変死事件」を読んだ

これは4年ほど前に発覚した猟奇事件についての本である。昔から「労務者の町」と知られた尼崎を中心に、1人の鬼女によって15年の間に他人を含む主として親戚の10人以上が殺害され、さらになおも行方不明者が居るという信じがたい事件である。

瞑想録(その19)

しかも子分と言うか加害者もほとんどが親せきで、言わば家族同士が殺し合いに持っていかれた事件だ。そして被害者には元は加害者側だった「角田ファミリー」のメンバーも居り、全部で5家族もがろくな抵抗もせずに喰いものになった。また中には、この鬼女を崇拜して豹変した子女まで居た。さらにこの鬼女は、逮捕後早々に刑務所で自殺してしまう。

この事件の鬼女とは角田美代子(逮捕当時64歳)で目的は金銭と支配権だ。その手口は親戚つながりで出会うと些細なことで因縁をつけて手下のやくざを連れて乗り込み、金を巻き上げた挙句に監禁や暴力で殺してドラム缶詰めし、あるいは自殺に追いやったものである。

もちろん一般論で言えば、因縁をつけられて一番怖い相手はヤクザである。自転車がちょっとベンツを擦ったくらいで乗り込まれて、数百万円とかを何回も破産するまでゆずられる。この手の因縁はどんな風にでもつけられるので、我々一般市民で絶対安全と言う人はいない。

ただヤクザや特に前科者の場合は、警察も把握していて結構相談にも乗ってくれる。だがこちらの事件の怖いところは、さも親子兄弟親戚間の内輪もめであるかに見せかけて、警察の民事不介入の原則を逆手にとって巧妙に警察を追い返して、被害者を裸にしたうえで死ぬまで貪り食うという巧妙なやり口である。

この事件については、素朴に不思議な点がいくつかある。具体的には、①宗教にしても詐欺にしてもきっかけは通常何らかの釣り餌にあるのにこの事件には餌が何も無い、②きっかけは些細な因縁なのに家族のだれもが怒鳴り返すなどして排除できなかった、③中には心酔して「信者」になった娘たちまでいる、の3点だ。これらの特徴は、「単に目をつけられたというだけで一方的に食べ物にされる」という、誰もがいつ被害者にされるかもわからない防ぎようの難しい事案だと言うことを示している。

ここで些細なきっかけとは例えば、①親戚の葬式で宗派が違っていると因縁をつける、②電車のドアに挟まれたと因縁をつける、③甥の世話を強引に押し付けてヤクザなので送り返すとふざけるなど切れる、と言ったきわめて一方的な因縁なのだ。

そして乗り込むときには、①はじめは気前よく子供を手なずけて人質に取るあるいは安心感を与える、②相手が油断したところで突然ヤクザな手下を連れて行って脅迫し威嚇する、③家族会議を主催して互いに悪口を言う方向に誘導して争わせる、④家

瞑想録(その19)

族親戚同士の民事的なケンカと見せかけて警察も返す、⑤覚せい剤などもやらせて人格を変える、と言った順序と手口である。

警察に帰られてしまえば、普通の人にはもう絶望してあきらめてしまうだろう。そして親戚被害者によっては、自らが加害者側になることによってターゲットになるのを避けようとする。そしてこれらの人の心理的な弱点の仕組みを主犯の角田はそれまでのすさんだ人生によって、裏の裏まで知り尽くしていたということだ。今回は被害者が死ぬほどだったので事件になって世間の耳目を集めたが、表ざたになってないだけの似たような金銭の強奪や家族崩壊は実は結構あるのではないかな。

先ずなぜ彼らが目を付けられたのか。これはたまたま角田が金に寂しくなった時に、ちょうど目の前に居たと言うだけだ。そもそもふつうの善人なら親戚だと言うことでたいてい警戒をしないので、言わば隙だらけの状態なのだ。そして小さな隙を見つけては、些細な因縁で強引にこじ開けて割って入る。初めは情け深い風をするのでうっかり人生相談などしてしまおうと、もう赤の他人でもこの時点で完全に終わっている。一言で言うと被害者家族はいずれも世間知らずで善良過ぎるのだが、だがこう言えば世の中の中の人の9割は善良の側に分類されてしまうだろう。

この事件はそれ以前に起きた不条理な暴力事件と、似た面がいくつかある。先ず大量殺人、角田に不従順な者や特に逃亡を図って連れ帰された者が、眠らせないし食わせない等のリンチの上で、昨日まで仲間だった親族に殴られて絶命に至らせている。この点はかつての連合赤軍の山岳ベースリンチ事件と似ている。

また善良だった娘が逆に角谷心酔して進んでワルになるところはオウム真理教の麻原教祖と弟子の関係に似ている。実際に角田のことを「教祖みたいな女」と呼んだ人も居た。このケースはおそらく善良過ぎて悪にイノセントすぎた娘が、それまで見たこともないような「教祖」の、「悪魔の一見万能的な魔力」に「開眼」してしまったと推測される。

最後に一番分らないのが、そこまでしぶとく生きて贅沢三昧をしようとした角田が、逮捕後になぜさっさと死んでしまったかと言う点だ。これはおそらく人生の底辺を知り尽くした角田が、「もう生きるも死ぬも何も怖くない」という、悪い意味での悟りの境地に入っていたためではないかと推測する。この悟りに、先の娘も心酔してしまったのだ。

現実に自分の親親戚や義親戚を、一通り見回してみよう。実は親戚の親戚ほどに範囲を広げると、多くの人が1人くらいこういう種類の人間の予備軍を擁しているのでは

瞑想録(その19)

ないか。そしてもしそいつがその気になって因縁をつけてきたときあるいは乗り込んできたときにどうしたらよいのかを事前に考えておかないと、実施に起こってからでは慌てるだけでも遅い。水際で食い止めないと、一旦割って入られたら解決は甚だしく困難になる。

ここで最低限必要なのは、①世間体など無視して厳然と処断すること、②相手の屁理屈に絶対に乗らないこと、それから③相手のすごみや空威張りにおびえないことだ。先ず警察に通報する。ナイフを振り回されて重傷になろうがとにかく通報だ。警察も民事不介入とは言え一度は来てくれる。

次にもし警察が返ってしまってもそこでくじけずに、その筋の弁護士や裁判所に駆け込んで味方になってもらう。この手の手合いは「自分より強い者」を見分ける目も鋭いので、自分が面倒な立場に置かれそうだとさっさと手を引いていく。そして一番基礎的な注意はたとえ親戚だからと言ってもその手の手合いとはできるだけ距離を置き、できれば一生会わないようにしておくことだ。

特に保有財産額等を、たとえ親戚にも悟られてはならない。金を持っていると思われれば、親孝行を理由にたかってくる親さえいるのだ。「財産は親にも教えない」、これは人生相談の回答の基本でもある。最近も父親に依る性的虐待の裁判で被害者の娘が、母親に指導されて裁判所に減刑店願書を提出したという事件があった。

<http://girlschannel.net/topics/977346/>

日本はまだこういう行為が平気で許される土壤の国だと言うことを、肝に銘じた方がよい。まとめになるが角田の事件の大根っこは上記の「親孝行土壤」にあると、私は確信している。

11、「評伝 ナンシー関」を読んだ

ナンシー関と言っても若い人はもう知らないかもしれない。かつて活躍した青森県出身の女性芸人評論家で、15年前の2002年に弱冠39歳で突然死している。

一目見たら忘れない独特の体形で、その評論の切れ味の良さや堀の深さは伝説的だった。本名は関直美、これから「な」つながりでペンネームは「ナンシー関」、私はつい「シンナー関」と読んでしまうが。しかも肩書は「消しゴム版画家」で、発想からしてなかなかユニークである。もっとも私の肩書も「昼飯写真家」だが。

瞑想録(その19)

この評伝はナンシーの死から10年後に書かれており、彼女の評論の普遍性が分かる。つまり一瞬で消えるTV番組やタレントの評伝を通じて、実は彼女は時代に風化しない普遍的真実を提案していたのだ。ちなみに「TV番組評論」というサブカルで一瞬をバツサリ切るというやり方も、事実上彼女がパイオニアである。

彼女のエネルギーの源は、小さいころからテレビやラジオの大ファンだったことだ。もちろん好きで見聞きしていたのだが、その情報量と整理加減が半端でない。自分でも「テレビを見すぎるとバカになりますよ」などと言いながら人一倍熱心に視聴した。それが彼女の自然で肩を張らない、しかもお茶の間目線で番組やタレントを通してその深みに隠れている普遍的真実を掘り起こす評論になった。

ちなみに彼女はそっちの方に熱心なあまり高校受験も大学受験も失敗し、東京で予備校生活を送った。翌年大学には入ったもののほとんど行かないうちに除籍になった。それでも東京でふらふらしていたら消しゴム版画を媒介にサブカル雑誌編集者の目に留まった。そして版画に合わせて文章も書いているうちに、こちらの方が主になって売れたと言う次第だ。

それなりに売り込みもして多少のやる気はあったようだが、通常よりははるかに順調に見出されている。そして最終的に文章の方が売れたと言うことは、本人は学校の授業などまともに聞いていないのだから、やはりラジオ等で習ったのと天賦の才能であろう。それにやる気と言っても鬼気迫るものでなく、どちらかと言うと「芽が出なければ町のおばさんでいいや」程度の深刻さのない人であった。

瞬間ものである番組やタレントの評論でありながら没後15年たった彼女がいまだに評価されているのは、①人の見すごす深みまで抉り出していること、②番組やタレントをネタにしつつも観客の側が潜在的に持つ意識の方を提示して見せていること、③しかもその提示物に普遍性があることなのだ。

時代的にもサブカルがあたかも今のネットやSNSのような興隆期にあって、それとシンクロした幸運さもある。彼女は早死にのせいで、活躍したのは10年強だ。だがもしいま彼女が生きていたら、現在のマンネリTVや量産タレントたちそれに世相全般をどう深掘してどう一刀両断にしたか、大変興味深いところである。特にバッシングが終わらない剛力彩芽とか突然出家した清水富美加とかについて、一言聞きたいね。

ナンシーにぼろくそに言われた典型がデーブ・スペクターだ。ナンシーはサブカルだから、正統ぶるとか利口ぶるとかもっともらしく常識を振りかざす系が大嫌いだった。デ

瞑想録(その19)

ーブについては「米国人のつまらない笑いを日本人に押し付けるなよ、寒いダジャレの連発で受けているなど勘違いも甚だしい」とバッサリである。そう言われてみると私もディズニー系の例えば「トイ・ストーリー」に見え隠れする、「笑いの強制」が大嫌いである。

他にも嫌われたのが中山秀征(司会者)とか小倉智昭(キャスター)とか、いずれもきれいごとで「裏を見せないわざとらしさ」とか言っているほどに「頭が良くないあざとさ」とか、鋭いところをついている。郷ひろみに関しては何かやるたびに評価が反転していて、これはこれで「よく見ている」という感じだ。あと蓮舫(れんぽう)については、「いつでも何でも話題を左寄りの政治不信にすり替える、少しは空気を読めないのかね」。これなんか今でも十分に通用している。

ナンシーを強いて現役にたとえれば、マツコ・デラックス辺りか。どんなに有名な俳優でも嫌いは嫌いとその理由もつけて歯に衣を着せずに評論し、聞いた方も「そう言われればその通りだ」と嫌悪者が増えるという回転構造で、彼女を敬遠する芸能人も多かった。マツコもTVで平然と「小泉進次郎大嫌い、チューターの単なるパロット」と、平気でこき下ろしていた。

サブカル分野の当時の専門家の評価は、「ナンシーは評論だけで十分に売れたが、そこに消しゴム版画と言う癒しがあることは加点对象だ」と言うものだ。だが私を含め多くの人は当時のナンシーを、「消しゴム版画のキャプション程度に文章も書く人」程度の認識だったのではないか。消しゴムと言うすぐ劣化する素材での「芸術」は、彼女が「長く売れよう」とか「時代を画そう」などと言う大それた野望などなかったことを雄弁に物語っている。

独特のスタイルと、分野とすらいえない消しゴム版画、これだけで印象に残るには十分だ。私など彼女の訃報に接してからそれまで気づかなかった私の中での彼女の存在感に、つまり彼女が亡くなってから発見した自分の心の空洞の大きさに驚いたものである。そして今回彼女を回顧したというわけだ。そこまでナンシーは何気に「何ものか」を残している。

死因は虚血性心不全、医師によると多少の自覚症状はあったはずだと言うがほぼ突然死だ。その生涯の短さは惜しいものの、今や誰もが喜ぶ典型的な突然死、まあ潔いことである。この本の副題は「心に一人のナンシーを」だ。私も彼女の慧眼とその文章化力を吸収して心に一人のナンシーを持ち続けたいと思っている。ナンシーの存在は、ある意味三島由紀夫や寺山修司と比肩できる。

12、理解したとは

事物は本来どんな物であってもことであっても、いくらでも深掘出来るものである。米1つ取ってもその品種や生育機構、更には味とかうま味とか柔らかさとか、もっと更には比重とか耐寒性とか収率とか病害虫対策とか遺伝子配列とか、深さにおいては原理的にいくらでも深く掘れて、「終わり」か「底」と言った「掘りつくし」はないのである。

このように終わりが無いにもかかわらず人は日々、どんな対象でもある程度の所で「分かった」としてもはや深掘を辞めて話を前に進める。「全部を分かっていないのになぜ打ち切って決断できるのか」などと原理主義的なことを聞かれても、そう言うことはそもそも不可能であり非現実的なのだ。

ではこの「分かった」という感情は具体的に、どういう形態で発生するのだろうか。これはあたかもテセウスの船のパラドックスのようで、特別切れ目のない連続体にあえて客観的なくさびを打ち込むと言う、真剣に考えると夜も寝られなくなるような種類の問題である。

そしてこの問題の存在も、根本的には本能の働きに帰着する。黄色と黒の縞が見えた時にそれが完璧にトラだと判断できてから行動しては、それが本当にトラの場合には食われてしまう。だから本能レベルで「黄色と黒の縞だ」と認識した時点でとりあえず「分かった」として本能的に逃避するように、人のOS(基本ソフト)は組まれているのである。

この現象を、より一般的に定式化しよう。分かったという感情ないしは命令信号の発信にはその前提として、その対象を理解する目的に対応した「知りたい深さ」が事前に設定されているのだ。そして分かったとはすなわち、「その事前設定したレベルに達した」と言う一種の達成感であり安心感である。

例えば美術館における絵画理解において、自分なりにその絵のモチーフすなわち描き手の言いたいところに感じ入れたと思えた段階で、「分かった」となって達成・完了となる。だからもし鑑賞する人が専門家ならその素人の時点では不十分で、もっと細かい筆遣いまで知らないと満足しないし「分かった」としないだろう。逆に素人なら抽象画を見た場合、「いくら見ても何だか分からない」と思うだろう。そして分からないときは専門家に聞くか、あるいは飛ばして次の絵に行く。

瞑想録(その19)

他方で駅の通路を急いで歩いているときなど、周囲の人や物が自分とぶつからないことさえ判別できれば、それ以上の情報はかえって邪魔である。人の行為には「始め！」と言う心象内の開始合図に対して「理解した」が完了信号であるので、理解できないと切れた思いが悪く後味の悪い思いがする。本能に安全信号を送れないからだ。

有名なアルキメデスの「分かったぞ(ユーレカ)！」も、「金属が違えば比重も異なる」と言う原理に気づいたところまでであって、それ以上は考えなかった。だが原子等ミクロの世界に無知であった当時としては仕方ないし、そもそもそれより深い知見など当座の問題に必要ななかったのだ。

もっとも「分かった」と言ってもその理解内容は人それぞれの興味や経験により異なるので、互いに完全に一致はしない。時には全く異なることすらある。個人的な体験で恐縮だが、ある友人の書家が「生死一如」と揮毫していたので「武士道の本懐ですね」とコメントを入れことがある。ところが実は御母堂が亡くなられたばかりで、その悲しみを慰める書であったのだ。

ましてやその心象を言葉に近似すればなおのこと、同じ対象を理解したとは思えないほど異なるものだ。それは言葉が近似に過ぎなくて、かつ多面的な理解のどの面を言葉にするかで表現はまるで違って来るからだ。ペコちゃん人形を見て「かわいい」と言う人も居れば「リボンが素敵だ」と言う人も、更には単に「頭が大きすぎだ」と言う人も居ることだろう。

このブログでは従来から、脳の理解の本質はアナログ集合であり波動であり、気づきやひらめきはこれら波動間の非線形干渉相互作用であるという視点を提示してきた。本質が波動だからアナログ集合はデジタル集合と異なって元同士の相互作用があり、集合は元の単純な足し算ではないのである。

この観点から「理解した」とは、該当する波動が受信できてかつその波動を心象として脳内に位置確定できたことを言うと言解する。今の波動が従来の経験に照らしてほとんどの場合厳密には新規なのだが、それでもそれまでに経験し獲得した波動群を基に推測できる。つまり同一でなくても「類似範囲」ならば、人ほどの脳ならば十分に理解可能である。人の脳力の本質は類似物の同値類認識である。

以上は「理解した」の意味を「設定条件を満足したか」の面で見えてきたが、もう一つ重要な観点に「プラトー」があるように思う。ここでプラトーとは「山の稜線の途中の平ら

瞑想録(その19)

なところ」と言った意味で、実験測定グラフの読み取り等で使う言葉である。プラトーの前後では変数を多少いじっても結果はほとんど変わらず、言わば準安定である。

「理解した」に安心感がある理由は、「到達した」に加えて「ほぼ安定している」があると思う。実際各自が心象現象を内省してみると、モチーフを理解したと思った時点で多少視点を振って、やはり同様の心象であることを確認する作業を行っているはずだ。

どうだろうか、今日の話は理解できてかつ共感してもらえただろうか。

13、鼻周りの手術をした

最近広い意味での鼻の手術を受けましたので、一連の経緯をまとめます。

事の起こりは昨年に、花粉の季節が終わっても鼻水や鼻詰まりが止まらなかったことでした。ネットで調べると「自然治癒する場合もある」とのことだったので、対症療法的な点鼻薬でごまかしてきました。ですが赤黄色い鼻クソが出てくるようになるなど悪くなる一方だったので、昨年末に近所で評判の耳鼻咽喉科を受診したという訳です。

すると初診でいきなり、頭部のレントゲンを撮られました。医師が説明するには、①鼻梁骨が異常に湾曲していてこれが鼻詰まりの原因だ、②両副鼻腔に蓄膿も見られる、③については手術によって鼻梁骨を矯正するとともに膿の除去が必要だ、④内視鏡手術なので人体への影響は軽微である、とのことでした。そして医者勢いは、「もう断れない」かのようなようでした。

若干大げさな気もしましたが、鼻梁骨の曲がり方は昔の学生時代に指摘されたこともあり、いわばセカンドオピニオンを先にもらっていた形です。それに医師の主張する処方の手順は明らかに医学の基本に沿ったものでした。ですからたかが鼻詰まりにこんな大げさが必要かと言う素朴な疑問もありましたが、「明日死ぬわけではないから1度くらい鼻周りのオーバーホールも良いかな」と、手術に踏み切った次第です。

医師の用意した手術計画書によると、正式病名は「鼻中隔湾曲症・肥厚性鼻炎・両慢性副鼻腔炎」でした。その医者は予約が多くて手術は3月初めまで待ちました。そして保険適用はあるのですが、さらに区役所で「保険限度額適用認定」を頂いての手術でした。そのためか手術金額は、総収入にも依りますが私の場合は数万円で済みました。手術の前には耳鼻科及び内科の健康診断があり術後の点滴も加えると、都合10回以上刺されました。

瞑想録(その19)

手術は医師の都合で早朝の為に、前日午後に入院しました。手術日は朝5時起きで準備を開始し、6時過ぎには手術室に入所し、7時に手術を開始して1時間ほどの手術でした。と言っても全身麻酔だったので麻酔をしてすぐに眠りに落ちて、次の瞬間に目覚めた時には手術は終わっていました。

麻酔は全身と局所を選べたのですが、私は「ゴリゴリ削る音が聞こえると嫌だ」と言う理由で全身を選びました。おかげで手術自体の痛みはなかったです。でも麻酔は頭だけでなく胃腸や体全体にも効くので、その通算丸1日は食べられないのはもちろん、吐き気とかめまいとかで地獄のようでした。

飲水も麻酔の関係により1日近く禁止で、胃はとにかくのどが渴きました。あたかも閻魔大王の炎熱地獄に居るかの気分で、「人が死にゆく前もこんなものか」と感じましたし、これが鼻でなくて癌の人は副作用とかもっときついことでしょう。それでも会社員を○十年嫌々続けてきたその「長い苦しみ」を思えば、容易に耐えられました。

手術中に粗相をしても大丈夫なように、看護婦の助言で手術前に紙パンツを着用しました。悪くないので術後もはき続けていたところ、夜くらいになって紙が尻や腰にチクチク触るようになり、床ずれ的な感触が出てきました。普段の布のパンツに履き替えたなら収まりましたが、紙パンツをずっと履かされている末期老人など本人が物を言えないだけで、結構と着心地が悪いのではないかと感じました。

さて、術後最初の2日は抗生剤とか止血剤とか点滴を10袋以上受け、3日目の朝にガーゼの副鼻腔からの抜き取りがありました。これは副鼻腔内の膿を、鼻腔から副鼻腔に強引にガーゼを押し込んでこれに付着させて引きずり出すものです。この術のおかげで昔のように「上唇の裏からメスを入れる」ような、痛くて面倒なことをしないで済むわけです。

副鼻腔は骨が2枚貝のように合わさった間の峡部で、頬骨の内側にあります。骨なのでガーゼを詰めても見た目は膨らみませんが、圧力は高まります。そのためにガーゼを抜くまでの2日の間、鼻と言うよりも顔全体に常に押し出されるような鈍い痛みがありました。ガーゼは鼻の両側にそれぞれ約10枚も強引に詰めてあって、抜くときは擦れて結構痛かったです。ただ抜いたら顔の痛みは止まりました。

退院前に医師から手術経過の説明を受けました。鼻梁骨の湾曲部分は骨髄も含めて削り、鼻肉の膨潤炎症部分は削り取り、他の鼻腔部分はレーザーで表面を削った

瞑想録(その19)

そうです。例年の花粉症も軽減されるはずだとのことでした。ちなみに鼻の見てくれは、良くも悪くも変わっておりません。

結局4泊4日で退院しました。退院後の頭の調子ですが、やはり頭に近い体をいじられたためか頭の働きも悪くなっています。退院初日の理解力は、ニュースのヘッドラインを受け身で流す程度でした。それでも日が経つにつれて徐々に過去に経験のある作業はできるようになり、更に日が経つと新しく考える要素が必要な作業も段々できるようになって、こうして今記事をまとめているわけです。ただし手術から3週間たった今も、頭の働きは以前の7～8分と言った程度です。不注意で気づきが悪くすぐ忘れてやる気が少ない、なんとなく「認知症はこう始まるのか」と言った感じです。

これらの経験は脳の働き、特に「経験のあるものほど容易であって新たに考えることが格段に能力を必要とし、しかもこれらの間に大きなジャンプがある」という脳の作動様式を教えてくれました。結局「考える仕事をする人が高給取りになること」に、一定の根拠をもらえたわけです。ちなみにこの当時のライフワークの瞑想については、「ネタは思いつくけれどそれ以上の展開できない」と言う状態でした。さらに当然ながら4日間断酒だったわけですが、禁断症状とかは特に出ませんでした。これは将来に、「糖尿だから禁酒」などと宣言されてもさほどビビらないという感触を得ました。

今は花粉の季節のはずですが医師から点鼻薬も処方されており、手術のおかげか例年ほどのくしゃみはありません。ちなみに術前に使っていた点鼻薬はナファゾリン系で血管収縮剤、術後に医師から処方された点鼻薬はフルナーゼ系で副腎皮質ホルモン剤、これらは作用機序が全く異なります。

まあホリエモンのムショ暮らしではないですが、「一種毛色の違った体験をした」というのが現状の総括でしょう。

14、意味を成すとは

山国の長野県出身で気象庁の職員でもあった小説家の新田次郎先生は、その著作の多くが山岳関係だったので「山岳小説家」と呼ばれていた。主要著作に富士山頂気象レーダーの建設を描いた「富士山頂」や、日本最大の山岳遭難事件である「八甲田山死の彷徨」等があり、後者は後に映画化もされた。

ところが先生は「山岳小説家」という決めつけの呼ばれ方が気に入らなかったらしく、「それでは何うが『平野小説』と言う分野はあるのかね」と常に返していたという。これ

瞑想録(その19)

自体はもっともだがここでは新田先生の好き嫌いは置いておいて、なぜ「山岳小説」はあって「平野小説」はないのかを考えてみよう。

もちろん主要舞台が平野である小説はたくさんあるが、それらをまとめて「平野小説」と呼ぶ気にはなれない。他方で「山岳小説」、これももちろん山の岩の形状の解説等ではなくて山での人々の生きざまを描いたものだが、なぜかすんなり腑に落ちる。そして山岳と平野は同じカテゴリーの、並置すべき単語の組だ。それが片方は通ってもう片方が通らない、摩訶不思議である。ここに脳の働きの重要なヒントが、何か隠されているのかもしれない。

もう少し幅を広げて一覧してみよう。「海洋小説」、これは通る。「極地小説」や「離島小説」、これらもほぼ通る。いずれもロマンとか別世界を感じさせる合成語である。では「妻楊枝小説」とか「ビール瓶小説」、これらはちょっとないだろうが、対象が小さくて細かすぎるせいだと理由は分かる。「宗教小説」、細かくはないが成立するかは微妙なところだ。そして「平野」、これは狭すぎないし意味も明確だ。

全体を振り返ってみるとそもそも、単語を適当につなげてもほとんどの場合意味が通らない。「電話釜」、これって要するに何だろう。「噴水警察」、おおよそイメージがわかない。「電球精神」、いったいどういう根性だろう。このようにランダムに組み合わせても大抵の場合該当する中身がない。だからむしろ合成により意味が通るものの方が例外であり、これらがなぜ通るのかを考えた方が生産的だ。

思うに「山岳小説」と言う合成語には山岳と小説の単なる足し算以上の、「山で働く人々の生きざま」が直ちに想起連想されて、合成語そのものが十分にロマンを感じる場所に落ちている。要するに相互作用と言うか化学変化があるのだ。「老人施設」、この言葉にはロマンはないけれども街で日常に良く見かけるし現に実態がある、つまり通る。

「販売促進」や「宣伝文化」、これらも自由主義下では必然的に発生しそうだ。続いて「真実科学」、これがありそうもないのは「科学はすべて真実だ」と言う一般的合意があるためにことさらに「真実」と冠するのが不自然で冗長だからだろう。逆に「似非科学」、こちらは通る。ここにも並列なのに非対称な言葉の組み合わせがある。ただし「平野小説」は依然として、この例では理解できない。

ただ以上の例を総合すると、結局意味が通るか否かは「2つの単語を組み合わせることにより相互作用で単純和以上の新たな意味が発生しうるか否か」にかかっている

と結論される。波動論で言うなら、アナログ集合同士の干渉効果や共鳴効果が起こるか否かで決まるようだ。人の脳も効率的に出来ていて、付加価値のないものなど保持しないのだ。

ではさらに深堀して、「山岳小説」には共鳴や干渉があるのにどうして「平野小説」は共鳴がないのか。もうここまで行くと、「個々の単語の脳内での守備範囲の違い」としか言いようがないように思う。平野とロマンにはたまたま、互いに接合し合う糊代がないのだ。

言葉は本来連続無限的な世界や宇宙や思想や感情を、有限個に切り分ける近似の道具だ。だから脳内空間が連続なのか有限離散なのかは議論があるところだけど、こと言葉にまで落ちてしまうと有限個への落とし方は個別具体的であって一般論や指導原理がないということだ。

だからもし脳構造も言葉に準じるものであったならば、脳の作用についていくら研究しても、役立たないほどにきわめて基礎的な部分以外には法則はあり得ないことになる。法則がなくて個別具体的だからこそ、人は20年もかかって学習と経験を重ねてやっと一人前になるのだ。この一般性のなさ、これは脳科学者にとってはきついブローカかもしれない。

法則のない分野をいかにまとめるか、これは従来から難しい問題である。工学でも①コロナ放電の様子とか②水蒸気爆発の仕方とか③竜巻の強さ表現とか、現象が乱雑すぎるので高々大雑把な言葉でしかまとめようがない。これで本当に学問と呼べるのか、際どい程だ。少なくともエレガントが宗旨の数理科学では、相手にされないだろう。

ソンケーされている脳科学者の茂木健一郎センセー、「クオリア」とか「アハ体験」とか「バナナを食うと頭が良くなる」とかがご託宣だ。はっきり言わせてもらうが、「そんな言葉にして何か中身があるの」とか「そうだとしたらだからどうしろと言いたいわけ」みたいな意味も深みもない戯言(ざれごと)の連続だ。まあ敢えて善意に解釈するなら、彼は感覚的には分かっているが他人に伝える精密な手段、つまり言葉と言うより数字のようなものを持ち合わせていないということかもしれない。

ところで逆転の発想で、「4字熟語でさえほとんどの組み合わせで意味がないのにどうして長い小説や細かい絵や歌や踊りが一貫性を持ち一定のモチーフを発信できるのか」を考えてみよう。単純な確率論なら天文学的にあり得ないことが起きていることになる。これを答えから言うならば、作る人や書く人が①モチーフの方をまず種として

設定して、②それをその後に肉付けして展開していくという順序だからだと考えられる。

15、茂木健一郎の「東京藝大物語」を読んだ

私は大学が理工系なら会社もおとなしい会社のおとなしい部署だったので、勉強は教科書をなぞるだけで仕事は全くの前例主義、個性を出さないことが最高のマナーである環境でこれまでの生活を送ってきた。そのせいか私の周りには金太郎飴しかいなくて、「世の中はどうしてこうもつまらないのだ」とあきれ返っていた。もちろん今でも付き合っている友人など一人もいない。

だから当然のごとくに個性がある人が好きなのであって、「個性こそ命である」ところの小説や絵画と言った芸術系の展覧会に足しげく通う毎日なのである。だがうすうす感づいてはいたものの、逆にこれほどに社会的訓練のないまるで原始人や利己主義のような人たちの集団も、「行き過ぎていてなんだかなあ」と感じるようになった。

ここで「自由な変人」とは、典型的にはインド狂いみたいな人達だ。「ほんわか堂」などと言う名の何を売っているのか訳の分からない店を一応「経営」してはいるが、気が向いた時に店を開けるだけ。好きな時に起きて好きな時に寝て、日常はマニ車などを回して歌を歌っている。腹が減ると仲間同士適当に集まって闇鍋(やみなべ)をしてそのまま徹マンに入る。私はこう言う出たところ勝負の無計画な人生に少しはあこがれつつも、「およそ1週間と付き合えないだろう」と感じる今日この頃である。どうしてこれらの両極端の中間層が居ないのだろう。

最近茂木健一郎センセーの「東京藝大物語」を読んだのだが、競争率数十倍で3浪当たり前のこの大学のエリートコースの油絵専攻、予想を裏切らずに本当に変人だらけなのだ。東京芸大に限らず芸大生や芸術学部生は、たいていが桁外れに非常識だ。芸術は科学技術と異なって、「いかに他人と異なるあり得ないことを作り出すか」が勝負だ。だから個性がないようでは最初から失格だ。だが彼らを見ていると逆に、「個性がきついほどそれに比例して成功が約束されている」と甚だしく勘違いしているとしたか思えない。

センセーの本に出てくる藝大生も、いずれもその期待を裏切らない。鼻水を何年も瓶にためている奴、評論家志望だが強度のドモリを治そうとしない奴、首から下を埋めてもらって「自演芸術だ」と称している奴、舞台上でロールちり紙を体中に巻き付けて「舞台芸術」と称して一人前に金をとる奴、真夜中に上野動物園の壁の外から独り猛獣の鳴き声を聞いて恍惚に入る奴、意味なく顔をペンキで塗りたくってウオーウオーと

瞑想録(その19)

叫ぶ奴、学食の屋根に砂を撒いて「インスタレーションだ」などと記録動画を取る奴等々のオンパレードである。

彼らのほとんどが芸大に入った時が人生の頂点で、9割9分がこれ以降は「鳴かず飛ばず」で終わる。こういうでたらめも最初の1個か2個は面白いかもしれないが、さすがの私も「堅物社員の方がトータル的にはまだましなのではないか」と思ってしまう恐ろしさ。

第一に彼らは発散しているだけで収束がない、第二に「社会訓練がないこと」が「何か特別な才能を保有していること」と勘違いしている、第三で最大の点は、「芸術家はどこか変人である」とことと「変人は全員芸術家に成れる」ことが全く異なるということを理解していない。まあ青春の一コマとしては悪くないかもしれないが、そのあと一体どう生きて食っていくつもりだろう。

一応断っておくとこの本は茂木センセーのドキュメンタリーではなくて、初の書き下ろし私小説だそうだ。事実に基づいているが虚構もあるという。PVも見たがどうもこのセンセーは、「科学者であるが小説家でもある」と言う自称「マルチ天才性」を売りにしたくてこの本を書いたようだ。

私は茂木センセーでも誰でも良いので、「芸大生の20年後」をこそ特集して欲しいと思っている。近世にアートが自由になったその分だけ、地に足をつけるのも難しくなったようだ。芸術の世界は自由が行き過ぎて、「なんでもインスタレーション」がそろそろ飽きられてきた。次の言わば「ポスト自由」は一体どこに行くのだろうか、まあこれを見つめられた奴は美術史に名を残せるよな。

書家の故井上有一さんがいみじくも教えてくれたように、人がどれだけ奇抜なことをしたって結局は「手足2本頭1個」の体を超えることはできないのだ。定年後にやっと書に没頭出来た井上有一さんの作品は確かに鬼気迫るし、彼の書は本人が文字通り時間を惜しみ書に命を懸けて取り組んでいたことが痛いほど伝わってくる。しかしながら彼は図らずも皮肉なことに芸術の限界、つまり「どんなに仁王立ちしてもこれ以上はありえない」を悲しくも体現して見せたと私には見えるのだ。あたかも易の「豊」(頂上)がむしろ悪い卦であるように。

ところで茂木センセーは、「クオリア」とか「アハ体験」とかことさらにネーミングするとか、「バナナを食べると頭が良くなる」などとことさらに主張しているけれど、これの主張に何か中身とかご利益があるとは思えない。「クオリア」なんて単に「質感」をカタカ

瞑想録(その19)

ナにただけでこの「解明」のおかげで何かが新たに分かるわけでも何でもなし、「バナナを食べたおかげで東大に合格しました」などと本気で言う奴が居たらこれこそ本当のお笑いだ。

このセンセーは本当に学者なのだろうか、「芸人でござい」と言うならば一応認めてやっても良いが。あたかも周富徳を「料理芸人」と呼ぶならば、茂木センセーは「学者芸人」と言ったところだろう。芸人としての格も周富徳と同じくらいだ、先日も「オワコン」発言で松本人志に恫喝されて、ただおろおろしているくらいだからな。

最後に茂木センセーが芸大の授業で来てもらった、あるいは言及した芸術家を以下に列挙しておく。ほとんどの人に付いて私は初耳だったが、ウィキ等で検索してみるといずれも当代の結構の芸術家のようだ。こういう人たちと知り合いだというのが、実は茂木センセーの最大の財産かもしれない。

大竹伸朗、藤田英治、三木成夫、津口在五、村上隆、モンドリアン、ヤノベケンジ、東芋、塩谷賢、鈴木芳雄、香川県の直島、福武総一郎、内藤礼、安藤忠雄、保坂和志、重松清、池上高志、森村泰昌、白洲信哉、杉本博司、小柳敦子、ビッグイシュー、車屋、宮島達男、三遊亭圓朝、佐々木厚、花野剛一、北野武、スピノザ、山本現代、荒川修作、熊谷守一、青木繁、藤田嗣治、佐伯祐三、川俣正、千住博、中村政人、奈良美智、村上三郎、高松次郎、赤瀬川原平、中西夏之、山下清。

16、真理と管理

一般に学校では「真理の探究が一番大切だ」と習う。そして科学者たちはその薫陶に従ったままの一生を送る。それが先生や学者が人間的に単細胞で幼稚な理由なのだろう。しかし会社に入って新入社員が先ず習うことは、「真理よりも管理の大切さ」である。そして管理とは嘘をつくことでもある。

新入社員が良く任される初歩的管理に、「需要箇所購買」がある。これは「単価が10万円未満の安価な品物は経理部を通さずにその部署が直接購入できる」という、合理性を重視した経理システムである。だがそうは言っても購買の素人がやることであるし、中には「経理部の審査を経ずに楽をしよう」と35万円の品物を4回に分けて重要箇所購買で買ったりする人も居る。

そしてこの購買にも半期ごとの〆があるので、担当新入社員は規則通りに〆てその期の総金額を経理部に報告する。だが中には〆終えた後で「悪いけどまだあるのだ

瞑想録(その19)

よ」などと言ってくる、古参の「嫌がらせ」的な駆け込みもある。「いったん経理部に報告してしまった数字を変更することはその部署の信用問題だ」と知ったうえで、あえて新人いじめの板挟みにするのだ。

さらに年に1回の社内監査で不正な分割発注が見つかり、注意処分になってこれまたまずい。そもそもだれもが学校の理科実験で測定演習とかをさせられたと思うが、物事に誤差はつきものなのだ。これは理科に限らず世の中全部に通じる普遍的な現象で、需要家諸購買など何千個もの細かい数字を足し合わせる作業だから、足し間違いなどしないわけがないのだ。

あるいはバグのないプログラムなどおよそない。これが真実の実態なのだが、この真実ばかり振り回しているとどんなに小さなことでも永遠に終わらない。だから必要悪としての打ち切り、つまり管理がある。結局「たかが需要家諸購買管理」と言っても、実際は小さな間違いやずれには目をつぶって嘘とごまかしで塗り固めないと、永遠に終わらないようにできている。

この「ゆがんだ現実」はおよそすべてに内在する以上、管理とは大なり小なり嘘をつくことと同義語だ。そしてこの管理のための小さな嘘をつけるか否かが、実は「第二の就活」とでも呼ぶべき踏み絵になっている。つまりヤクザの世界と同じで、嘘について傷物になって初めて社員の仲間入りになる。まさに兄弟仁義の世界だ。

ここでどうしても嘘をつけない社員は事実上仲間に入れてもらえず、次第に浮いていく。特にいかにも清らかな人ほど、周囲の引きずり落としが尋常でない。「天使ほど汚さないと気が済まない」心理が働くのだ。そうしてしばしば汚れ役が指定席となって、もう居られずに辞めていく。平均的な人は小さな嘘が実績とされて次は役所に提出する書類に嘘を言わされたりするが、まあそれ以上は強制されずに仲間にしてもらえる。

そしてこの嘘つきの上手下手が、事実上出世も左右する。そのようにして出世した東芝の歴代社長は、嘘に麻痺してついに不正経理をやって会社をつぶした。私はこれら3社長のような人物を社長に抜擢した歴代の元社長にも、任命責任があると思う。

必要悪と言えどそれまでだが、ここまで嘘をつき通してやっと成れるのが社畜と言う歯車、悲しいものだね。結局世の中で一番大事なのはけじめだ。区切って忘れる、この繰り返し。さもないと事がありすぎてとても対応できなくなる。会社なんて管理の塊、従ってけじめのための嘘の塊だ。法律では解決できなくて裏の筋に頼むこともあれば、また逆に裏から脅かされることもある。

最近私は、かつて不正経理をしたホリエモンこと堀江貴文氏のムショ日記である「刑務所、わず」を読んだ。あらゆることへの好奇心はムショの中でもまた出所してからも旺盛で、その態度はほとんど中二病を想像させるほどである。ホリエモンは会社をやってつぶして、ごまかそうとして出来きれなくて株主に大迷惑をかけて、これだけやってヤーと無関係でいられるとはおよそ思えない。

だが本で見る限りのホリエモンは、懲りたはずの今でも隙だらけの明るい青年である。今まで本当にヤーと対応できていたのだろうか、これからどうやって付き合っていくのだろうかと思うと、摩訶不思議である。世の中が好奇心と思い付きだけで済むのなら、つまり頭が良いだけで済むのなら、こんなに楽なことはない。

要するに世の中が学校の先生が言うように真理の探究と研究だけで済むのなら、どれだけ実験で徹夜しようがまたノーベル賞級の賞を取ろうが、こんな気楽な極楽トンボみたいな人生はないのだ。その辺の商店街のおやじだって、何とか税金を減らして店を維持するために、かなり際どいことをやっている。こちらは会社のためでなく自分のためなのだから、それこそ真剣度だって天と地ほど違うだろう。

本の一節を引用しよう。ホリエモンが「刑務所って体育系の乗りと上下関係と不合理の塊だぜ」と言うと、面会に来たあの「2ちゃんねる」のヒロユキさんが、この人も実はホリエモンに負けずに現実離れした人だが、「そういうことは皆さん新入社員の時に経験するのですよ、堀江さんはなかったのかもしれないけど」と諭していた。およそありえない光景だ。ヒロユキさんに常識的な平社員の経験など、あったと思えない。

私も若いころは鬼軍曹から、火タバコで世の中を教えてもらった。きっとその鬼軍曹に感謝すべきなのだろう。

17、きみまろの「失敗は、顔だけで十分です」を読んだ

綾小路きみまろ、爺さん婆さん相手に毒舌を吐いて大うけの変わった漫談家です。もっとも本人は遅咲きでなかなか売れなかったのが、毒舌のちょっとした間に私は彼に人生の深みを感じてしまうのですが。

私が彼のこの本を読んだのは、以下の二連の動機によります。①笑いは脳の典型的な働きでこの作用機序を瞑想することは脳の解明に有効のはずだ、②今までの瞑想の成果で笑いの前提条件の一つとして「視聴者が優位に置かれている安心感」があ

瞑想録(その19)

ったが、きみまろの笑いは逆に視聴者をバカにしているそれでもなお受けているのが不思議だ。そこで彼の笑いを精査してみました。

以下にこの本から彼の笑いの典型をいくつか、抜粋してみましょう。

- ・私は目の前にきれいな人が居るとドキドキするのです、今日のはのびのびとやっておりますが。

- ・くよくよすることはないです、人間の死亡率は100%です。

- ・目じりが下がり、おっぱいも下がり、おしりも下がり、上がったのは血圧だけです。

- ・男性に突然襲われたことだってありました。今襲われるのは、めまい、息切れ、動悸。

- ・その洗練されたファッション、飾り気のない美しさ・・・、開いた口がふさがりません。

- ・豊かな教養、あふれる美貌に、こぼれる脂肪！取り返しのつかない三段腹、こんな体に誰がした！

- ・きれいですねえ、そのネックレス。きれいな方ばかりです、首から下が。

- ・若い時はきれいだったのです、そこで笑っている奥様、面影はないですけど！

- ・やせることないです奥様、ブスがやせてもブスです。

- ・花も咲かない枯れすすき、登り切ってもいないのに下り坂。

- ・うるんだ瞳に輝く目ヤニ。

- ・若いころは男の間を行ったり来たり、今はお墓と仏壇の間を行ったり来たり。

- ・出会ったころの妻はかわいかった。あれから40年！今思うのは「あの時食べておけばよかった。」

- ・女房が葬儀屋のチラシを保存するようになった。

- ・久々のお化粧、旦那もあとずさり。

- ・センスの悪い服ばかり買っている主人に文句を言ったら、「お前を選んだのは俺だぞ。」

- ・「お父さんダメ、今日は危険日」「お前も今晚が峠か、俺より先に逝くのか。」

- ・すごいところです、老人ホームは。何をしゃべっても反応がないのです。

- ・1等賞は「墓地一区画御影石付き」、2等賞は「銀の骨壺」、3等賞は「白木のお棺」、4等賞は「こんがり焼き権」、5等賞は「霊柩車のただ乗り券」。

さてこの人を考えるのに忘れてはならないのが、同じ毒舌では先輩格の毒蝮三太夫です。「いやー、今日も死に損ないのババアどもがわんさと集まっているじゃないか」「おいそこのババア年はいくつだ、旦那は元気か?」「何、もう死んだ、お前が首を絞めたのだろう」、

こんなことを言われながらも、当の婆さんたちは大笑いしているわけです。これらの毒舌家とその反応からいくつかの特徴が考えられます。第一に毒蝮やきみまろ等毒舌家の、出来上がった既存のイメージです。彼らが毒舌なのは事前に分かっているからおも聞きに来る、と言うことはこの視聴者たちは暴言に対して事前に準備ができています。もしこれらの暴言の主が評論家の田原総一郎とか役者の役所広司とかであったりしたら、これらの婆さん達も不快な思いをすることでしょう。

さらに「婆さんくらいになると自分が馬鹿にされても、相手にされているというだけで嬉しい」と言う可能性が考えられます。同じ暴言でも二十歳前後の女の子が見知らぬ人に「お前は何回男と寝たのだ」などと言われたら、それこそ警察を呼びますよね。婆さんなら平気で「山ほど」とか答えるでしょう。

第三に「婆さんたちは頭が緩くなっていて、自分がからかわれても隣の友達がからかわれている程度の自己認識しかない」と言うことも考えられます。いじられているのが自分でなければあるいは当事者意識がなければ、彼ら毒舌家の暴言はこよなく快感でしょう。

以上の特徴抽出が的を射ているとするならば、毒舌は従来 of 通常の笑いの変化球であって、際どいところはあるものの「自分が上位に立っている」と言う原則は依然として崩れていないことが分かります。「いじめでいじられている優越感」とでも言いましょうか。本の巻末の解説を書いたキャスターの小倉智昭さんも、「彼らの笑いの本質は年と人生を重ねて初めて分かる」と言っておりました。

18、トランプ保安官

「アメリカ・ファースト」を公約に下馬評を覆して昨年末に米国大統領にアッと驚きの当選をした、実業家と言うか鐘稼ぎが本業のドナルド・トランプ氏、その公約と経歴を裏切らずに海外製品にバカ高い関税を掛けるし本気でメキシコ国境に壁を作り始めました。オバマケアも全面即時廃止を目指しています。

その「ぶれない」言行一致に米国のいわゆる知性派と言うか上品派と言うか博愛派と言うか従来派は、「米国の良き伝統を破壊する」と言って非難ごうごうです。50州の州務長官の連名で「トランプは米国の伝統を壊すな」との抗議文が来たり、違法滞在者の即時退去やオバマケア全廃には司法が待ったをかけたりしました。ハーバード出身のインテリ俳優のパックンも、「これからは我慢の4年間」と失望を隠しません。

そのアメリカ・ファーストで特に「世界の警察のようなムダ金は1円たりとも出さない」と明言して、「日本も本気で国防軍を組織しないと、自分の国は自分で守れとは言われてみれば当たり前だ」などと日本にも影響重大なトランプさんが、先日突然にシリア軍にミサイル攻撃を仕掛けました。しかもご丁寧なことにこれは「北朝鮮への警告でもある」と明言し、有言実行で原子力空母のカール・ビンソンを朝鮮近海に移動させました。

確かにシリアのアサド政権は、ナチ同様の無慈悲な独裁政権です。反対派制圧に何回も国際条約で禁止されているサリン等の化学兵器を使ったこと、それによって多くの一般市民が巻き添えになったことは明白です。でもだからと言ってそれが、米国の国益とどういう関係があるのでしょうか。これこそほとんど全くの1円にもならない、「世界の警察」ではないでしょうか。世界中の多くの人々が頭をひねったはずです。

無理やりこじつければ「石油運搬ルートの安全確保」とか「国内軍需産業の手助け」とか作れるのですが、あの米国人の中でも特に単細胞なトランプさんがこんな回りくどいことを考えるはずがありません。あざといヒラリーの方ならまだ考えられますが。実際にこういう世論や論調は、全く出ていません。

では移民を強制排除して国外産品にバカ高い関税をかけるトランプさんがなぜ支離滅裂にシリアと北朝鮮では世界の警察をしたのでしょうか。実はこれは支離滅裂でも何でもなくてむしろ選挙中からにじみ出ていた態度であり、この「にじみ出た態度」にこそ米国の有権者は投票したのです。つまりトランプさんが体現しようとしているのは100年か200年前の米国、つまりフロンティア精神の西部劇のあの分かりやすい光景だということです。

自分たち日本人を振り返るとその郷愁は1000年前の源氏物語や百人一首の世界にワープするのですが、その同じワープと言うか郷愁を歴史が短い米国人は150年前の開拓時代と西部劇に感じます。西部劇と言えば昔の日本でも「ララミー牧場」とか「名犬リンチンチン」とか「OK牧場の決闘」とか「アニーよ 銃をとれ」とか「ブロンコ&シャイアン」とか「大草原の小さな家」とか、日本でも昔に放映されましたよね。あの世界です。

あれが結構最近、少なくとも戦後しばらくの間まで、米国の「ヤンキー魂」でした。「男らしく未開地を切り開く、しかししずるい奴は許さない」、これが米国の義理人情の世界です。それが先の大戦の唯一の戦勝国として世界の富を握るようになったところから、いつの間にか「安っぽい過ぎたヒューマニズム」で女々しくなっていました。

ベスト&ブライテストに数えられるためには博愛でなければならず、かつてインデアンを虐殺したことを国民総懺悔(ざんげ)し、その代わりと言う訳ではないのですが富に任せて事実上「世界の警察」をやってきました。こう言う行為は、上面(うわつつら)のキリスト教精神には合致するのでしょうか。でもその代わりに竹を割ったような性格はお蔵入りになって、「表面だけ良い」二重人格が事実上奨励されるようになりました。そうして時代が下って今、米国の経済力ではもはやそんな「いい子ちゃん」はやっていられなくなったのです。

そこに敢然と現れたのが西部の町のトランプ保安官、これでなくてどこに米国の再生があるでしょうか。そして西部の荒くれ男は自分の国に忠誠を誓い何でも自分で切り開くのですが、同時に悪徳やずるや抜け駆けを嫌いました。西部劇では市民が団結して悪徳シェリフを始末する場面が良く出てきます。もう少し古いですが、「負ける戦と知りながらアラモの砦へ駆けつける」デイビー・クロケットと言う人物も居ました。

そうです、トランプさんはまさにこの手の正義の開拓者保安官の再来であり、米国民はもはや陳腐になった博愛主義でなくこちらを選びました。だから西部劇の立場に立つならば国内産業保護とシリア爆撃は全く矛盾しません。現にシリア爆撃によってトランプさんの支持率はアップしました。これからのトランプ政権の行動予測をしたいなら、ぜひ半世紀前の白黒の西部劇映画や番組を再視聴してください。

それと今でもまだトランプさんをバカ呼ばわりあるいは非国民呼ばわりしている米国内外のいわゆる博愛知識人たち、あなたがたは日本で毛虫のように嫌われているプロ市民や、ゴルバチョフのペレストロイカに抵抗した旧体制既得権益の共産主義者たちと何ら変わりがありません。新思考について行く柔軟性がないだけです。

ではそんなトランプさんに日本はどうすればよいでしょうか。西部の男には義侠心があります。「兄貴」と頼っていけば「おう坊や」とかわいがってくれるでしょう、もちろん度が過ぎてはダメですが。あとは悪徳の国と一緒にやってつけるとともに、日本ももっと男になって独り立ちして自分の国は自分で守るという大人の態度を見せる、まあそう言うことでしょう。

19、夢と解釈(その10)

＜夢1＞私は中学生であった。進学早々教室の廊下を歩いていると音楽のおばさん先生が突然私に、「合唱クラブに入りなさい」と指示する。私は当時理数系の鬼でこちらを勉強したいと思っていたので「嫌です」と断る。すると「逆らいは許しません、放課後に音楽室に来るように」と、さらに強く指示する。回りにいた女の子たちも、「ヤーイヤーイ捕まった」などとはやす。私は無視して行かなかったが、いつ親に言いつけられるのかと思うとびくびくして気が気でなかった。

＜解釈1＞私は学生時代には、希望しない下らないことばかり言いつけられていました。実際に学校には、嫌な思い出しかありません。

＜夢2＞小学校高学年くらいだろうか、皆でお泊り会にきてグループに分かれて寸劇を披露しあった。「商店街を話しながら覗いて回る奥さん連」とか、「消防団の活躍の様子」とかだ。シナリオの一つは私が考えたものであった。しかも終わった後で聞いてみたら、我々のグループの出し物の評判が一番良かった。

＜解釈2＞数日前にエホバの証人たちの潜入ルポ本で「伝道練習の巻」と言うのを読んでいたのも、それが印象に残っていたのでしょう。

＜夢3＞第二次世界大戦前夜だと思う。私は帝国海軍の戦艦に乗っていた。すると女性が船から離脱してしまう。私は彼女を救済しようと追いかけると、以前にも会ったことがある宿敵のソ連のスパイのコズロフに出くわした。無事彼女を取り戻して船に戻ると、船は北上して択捉も過ぎてアムール川を遡上しようとする。するとその時に海中から、いきなり人魚が捕獲された。先の彼女とは違う女性だった。

＜解釈3＞映画の「択捉遥かなり」が、まだ見ていないけれども気になっていたのだと思います。

＜夢4＞北欧の人と話をしている。「北欧の人は好きなのだけど皆クリスチャンなのですよね」と聞くと、「まあ一応ね」と答えてくる。そこで私が「コチコチのクリスチャンはどうも好かなくてね」と返すと、「実はキリスト教と言うのは建前で、皮一枚めくるとまるっきり多神教の北欧神話の世界なのだよ」と答えてくる。これを聞いて私は安心をした。

＜解釈4＞私はどう考えても一神教が嘘っぽくて大嫌いで、多神教のアニミズムをこよなく愛しています。

＜夢5＞私は面接試験を受けている。入社試験か入学試験かは分からない。「池があって全体としてゆっくりと流れていますがある部分だけ急流です、なぜでしょう」と問

瞑想録(その19)

われて、「その部分だけ川幅が狭いせいだと思います」と答えた。すると更問で、「では先の急流の部分の流れが緩やかになりました、ということが考えられますか」と聞いてきたので、「水位が増して相対的に川幅が広がったのではないのでしょうか」などと答えている。

＜解釈5＞今回の問いは特に難しいものではないですが、問答とか面接とかはどうも好きになれません。好きな人など居ないのかもしれませんが。

＜夢6＞夕暮れ時に一人で山道を歩いている。なぜか私の夢に良く出てくる山道だ。すると今日は途上に虎が寝ている。私は虎を起こさないように、静かに避けて通り過ぎた。すると日が暮れてあたりは急に暗くなり、虎が目を覚ました。私はまずいと思ったが、暗くて道が見えない。ふと遠くに寺の明かりが見える。私は必至でその寺に駆け込んで助けを求めると、和尚が銃をもって飛び出していった。私は「そんなことより私を早く寺の中に入れてくれないかな」などと、まだ不安でいる。

＜解釈6＞何気に未来が多難な予感がするのでしょう。

＜夢7＞中学生くらいか、クラスで「のど自慢大会をやろう」と言うことになった。一人一人順番に歌ったが私が一番の悪ガキで、「へたくそ、やめろー」とか「うるさい、このブス」とか悪態の付き放題だった。クラスの他の子たちも調子に乗って悪態の大合唱になり、歌った子達は半ベソで舞台を降りていく。それにもかかわらず私の心はなぜか、悪ガキの自分の方でなく半ベソの級友の方に感情移入していた。

＜解釈7＞悪いことをしてすっきりしたい心と、そんな勇気がなくていつも被害者側に回ってしまうリアルな自分が、夢の中で微妙に共存していたのだと思います。小さな人間ですね。

＜夢8＞私は同僚や知り合いたち大勢と、宴会に出ている。どうやら打ち合わせが終わった後の懇親のようで、和式の膳がずらっと並んで50人か100人くらい居そうだ。そしてなぜか部屋中が金箔なのだ。宴会や人の群れが嫌いな私は自分の食べ物だけ平らげるとトイレに行く振りをしてさっさと抜け出して、泊まる部屋行きのエレベーターに乗った。そのエレベーターがとても速い。あっという間に私の部屋のある40階に着いた。やはり金ぴかだが夜景はきれいだ。私はなぜか自分の部屋の風呂でなくて、浴衣を着て洗面器をもって大浴場に行こうとする。

＜解釈8＞趣味の悪い金箔ホテルで大した知り合いでもない奴らと会食。隣の奴のつまらない話題に相槌を打ったり話題をでっちあげたりとか、もうこりごりです。不潔な地獄ですね。

＜夢9＞近所の私鉄会社がバックヤードツアーをやるというので、参加してみた。バンデグラーフ発電機とかキルヒホフ型岩盤粉碎機とかいろいろ見せてくれて、「いずれも現役だ」という。一通り見せた上に電車で送迎してくれたが、「あんな古いものを本当に今でも使っているのか」と、素朴に疑問に思えてきた。

＜解釈9＞疑問に思っ「うーん」と考えているうちに夢から覚め、なおも考え込んで居ました。この朝は夢と現実がシームレスに繋がっているようでした。

20、佐藤優の「インテリジェンス人生相談」を読んだ

著者の佐藤優(まさる)さんと言えば、知っている人も多いかと思います。「外務省のラスプーチン」と呼ばれて、有罪が確定して収監された鈴木宗男元代議士とつるんでノンキャリアのくせにやり放題をし、外務省でのさばった挙句に本人も首になった人です。ちなみにラスプーチンはロシア正教の怪僧で、ロマノフ王朝を食いものにして滅亡に導いた悪人です。

佐藤さんは同志社大学の神学部の大学院卒で、その情勢分析能力は日本人離れしてプロスパイ並みです。そのおかげで外務省を辞めてからも、TVや雑誌で引っ張りだこでした。その佐藤さんが、某週刊誌に連載した人生相談をまとめたのが本書です。

個人偏と社会編の2冊から成り合計500ページ、短気な私がこれほどの厚い本を読んだのは、学生運動の結末としての山岳ベースリンチ殺人事件をまとめた永田洋子の「十六の墓標」上下合計で700ページ以来です。この本の題の「インテリジェンス」とは諜報活動のことですが、日本は建前上諜報はやりません。

本日の本は諜報とは直接関係なくて、異形の知の人である佐藤優さんに人生相談もさせてみようという出版社の粋な計らいの結晶です。ちなみに佐藤さんが相談回答に当たって応用した学問は、「牧会学」です。これは牧師がどうやって教会運営をしているかをケーススタディで勉強する、きわめて実践的な学問です。キリスト教業界では有名だった鎌倉雪の下教会牧師の加藤常昭さんも、長いこと東京神学大学の牧会学の教授をしていました。

ここで面白いのは佐藤さんが牧会学と言う「良い子の学問」を応用しながらも、その回答の方針を「建前を一切捨てて本音を書く」としたところです。具体的にはチ○コとかセ○クスとかオ○ニーなどと言う単語が山ほど出てきます。また随所で「これは汚い手なので使わないように」などと断りつつも、その汚い手を詳細に説明しています。これはもはや「悪魔の辞典」ですね。それでは以下に、具体的な回答例を挙げます。

瞑想録(その19)

<性愛編>相談:専業主婦ですが男漁りが辞められません。

回答:出会い系サイトはスリルがあるでしょうが、性病やエイズをうつされる上にヤクザに肝をつかまれてどの沼にはまるのが落ちです。先ず病院に行って性病の検査を受けてください。そして旦那にばれて離婚されて慰謝料をぼったくられる前に少し賢くなって、頭で想像してオ○ニーするだけにして下さい。

<家族編>相談:夫が佐藤さんのファンで佐藤さんの本を山ほど買い込んでくるのですが、およそ役立つとは思えませんので辞めさせてください。

回答:自分が儲かるチャンスをわざわざ潰すようなバカ者は、この世に居ません。それよりもあなたもそれらの本を読めば、単価が事実上半額になる上にあなた自身も心が豊かになります。

<思想編>相談:世の中がバカバカしすぎるので、無差別テロを起こそうと思っています。

回答:あなたの敵を利するだけです。テロで殺された悪党どもに同情が集まるように、日本の国はできています。私はごまんという腐敗外務官僚に、あくまでも言論で闘争しています。

<学習編>相談:佐藤さんは小林よしのりのような格下と雑誌で論争して、何か学びになるのですか？

回答:売られた喧嘩ですし、小林さんは「売れている人」であって格下ではありません。雑誌での論争は損得抜きで面白いからやっていますが、つまらなくなったらすぐに辞めます。

<貧困編>相談:最近の日本は金持ちとか貧乏と言った身分が、固定してしまっているのではないのでしょうか。

回答:小泉改革の新自由主義は、階級を固定して貧富の差を拡大する副作用があります。でも共産主義は失敗作であることが証明されましたし、個人が嘆いたところで世の中は変わらないので、大望を抱かずに与えられたところから見える範囲で頑張ってください。

<国家編>相談:日米が北朝鮮の手玉に取られていて、悔しいです。

回答:その北朝鮮とつるんでいるのがイランです。イランは親日国ですが北と手を組んで核爆弾を開発して、イスラエル抹消を目指しています。これは世界大戦に繋がりがかねない危機的状況です。外交はこのように広い視点で見てください。

<処世編> 相談: 会社でいじめを受けているので、転職しようかと思います。

回答: 勘違いがあるようですが、会社とはそもそも生活費を強奪する場です。「嫌な奴は辞めさせても自分は梃子(てこ)でも動かないぞ」と言う態度が正解です。

<未来編> 相談: 私は今小児科医をやっているのですが、本当は小説家になりたいのです。

回答: やる気があればできます。先ず目指す文学賞を決め、かつそのために1日2時間、強制的天引き的に時間を工面しましょう。目標はノーベル賞とか高い方が良いです。健闘をお祈りします。

佐藤さんは自分を「頭が良いわけではなくて状況に置かれて努力してきただけだ」と言っていますが、読後感としてはやはり謙遜でなくその通りだと思いました。ただ佐藤さんの場合は頭の構造がやや特殊に出来ていて、諜報が本業に向いています。「自己防衛・敵陣洞察・先制攻撃」みたいな能力が突出していてかつそれが生かせる場に居るために、楽しい人生が送れているのではないかと感じました。

もし彼が100年前に生まれていれば、日露戦争を裏から勝利に導いたかもしれません。あるいはもし秀吉の子飼いだったら、あたかも蜂須賀小六のように大名に取り立てられたかもしれません。そう言う意味で稀有な人物だと感じました。回答には多少のエリートコンプレックスも感じましたが、概して掘り起こしが深くて脳構造の解明にも寄与しそうです。あと各回答に1冊ずつ、回答に関係の深そうな本が紹介されています。このリストも結構役に立ちました。

21、「ワーキング・プア」を読んだ

ワーキング・プア、日本でも既に問題になっている。派遣やバイト等の非正規労働者の賃金が不当に安すぎる、働いても生活がやっとで結婚できない、結婚しても子供などおおよそ作れないと言った悲痛な叫びだ。

長期的には出生率の減少等や悲観的な将来見通し更には貧富の差の拡大と身分固定等を通して、日本の経済や国力をボディーブロー的に奪っていくだろう。私だって誰だって、絶対にワーキング・プアならない保証などない。

ただし今回読んだ本は英語からの翻訳で、主として米国のワーキング・プアの実態を分析したものである。働くとか貧しいと言った言葉はかなり国柄や国民性が左右する

ので、「米国の実態を知ったからと言って日本根の参考になるか」との疑念もあるだろう。それでも敢えて米国の事情を知ろうとした最大の理由は、「自己主張の国の米国で彼らはどうして主張しないのか」と言う素朴な疑問である。

ちなみに本書のサブタイトルは、「アメリカの下層社会」である。また原著はサブプライム(貧困層、低信用層)問題であるリーマンショック以前に書かれており、この教訓は反映されていない。また、厚い本なので全部は読んでいない。

この本の冒頭にここでの貧困の定義があり、「年収〇万ドル以下」と言った数字では区切っていない。その理由に「米国の貧困層の方がベトナムの中間層よりも数字上は収入大である」と言う例を挙げて、貧困は金銭だけでなくもっと総合的な日々の生活ぶりの問題だと主張している。つまり冒頭から米国人が得意の、「数値信仰」を捨てた形となっている。

たしかに一般の生活水準つまり最低必要経費も、昔と比べてスマホ、水洗トイレ、エアコン等近代的な家、自家用車等々、かなりお高くなっているという点も見逃せない。また医療も長足の進歩をしていて、これも実質可処分所得の圧迫要因になっている。

本書の貧困層の定義は、「構造的に働きより少ししか支払われていない人」である。つまり「ぼられている人」が、この本の貧乏の定義と言うことになるだろうか。ただこういう定義だと、例えば大会社のCEOがウエイトレスママの1万倍の給料をもらっているのは米国ではよくある話だが、「CEOの経営判断する金額はそのママたちの1万倍以上だ」と言う主張も成り立つわけである。

日本なら格差と言ってもそこまで開いていない。日産自動車やソニーと言った特殊例もありグローバル化に従ってこういう例が増えてきつつあるのだが、それにしても「非正規の年収が200万円で雇われ社長の年収が3000万円」と言うのが相場だろうから、日本では貧富の差は15倍程度だ。

さて米国流の「1万倍」の主張は分かりやすく一見もっともだが、本書を読んで思ったことは米国の貧困層は日本以上に構造的に貧困だということだ。彼らは貧困である以上に精神生活が破たんしている。人種的には白人も居るが、非白人と未婚の母たちの割合が高い。人種問題の介在は日本にはない要因だ。そして彼らの多くが構造的に、つまり永遠に貧困から抜け出せないでいるのだ。

米国では、①貧困者をターゲットにした悪徳高利貸しがさほど悪だと思われていない。②派遣手配会社のピンハネは当たり前。③ソフトスキルしか金にならない。また各種補助制度が自己申告制であるところ、彼らの多くは④日々に追われてそれらの制度を勉強する精神的余裕もない。

さらに彼らの多くがそもそも貧困特有のすさんだ家庭に育っており、その意味でも⑤貧困層が遺伝する傾向にある。そして何よりもキリスト教の「勤勉であれ」が逆解釈されて、⑥「貧乏なのは自分のさぼりのせいだ」と言う社会常識になっている。リーマンショックは「貧困層への高利の貸し付けが崩壊した問題」と言う面があるが、これはある意味「貧困層の無言の抵抗」とも見える。

本書を読んでいまひとつ日本と違うのが、彼ら貧困層が「ワーキング」と言いながら余り働いていないことだ。だとしたら日本のケースと単純に比較できないし、本当に「自分のせいで貧しい」人も結構居ることになる。そもそも収入が少ないのに更にフードスタンプや粉ミルクまで売り払って酒やドラッグを買い続ける、人格破たんした親も多いようだ。

ただ米国ではすべてを、従って賃金体系も決めるのは圧倒的に富裕な経営層である。彼らは「自分の給料を高くして一般労働者の給料は安く抑える」のが当然と言うかむしろ有能な経営者である証拠であり、そして一般労働者は何のスキルもないので経営層が提示した条件で働くしかない。そう言った反社会資本的行為が特別問題にならない社会構造が米国にはあって、そこが日本とずいぶん違うとの感触を受けた。日本もこうならないことを願う。

要するに米国は良くも悪くも数値至上主義の、数値信仰の国なのだ。「数字になるものしか信じない」、これはかなり低級な信仰である。日本を鏡に見てみると米国の富裕層は結局、余裕とかもてなしとか生活権とか思いやりと言った、数字にならない社会資本を食い物にして数値化した上でそれを自己の収入としているわけだ。この社会資本の少なさが回りまわって貧困層の精神的破たんに至っている、つまり「見えない搾取」である。

「社会資本の数値化」を分かりやすい例で見よう。海の魚を少く採っても生態系に変化はない。資源は減らないし採られなかった魚は寿命が来て自然死するだけだ。だが生態系を壊すほどに自然を食いつくすと、漁獲高と言う数字は上がるがその魚は減少して絶滅し、最終的に社会全体を覆すことになる。数えられないものの数

値化とはこのように「見えない食い物化」であり、数値信仰はこの手の脅威を正当化し目隠しする信仰だ。そして結果として、今の米国のやりようのない貧困層がある。

だから本日の冒頭の疑問である、「自己主張の国の米国でなぜ貧民層が声を上げないのか」の答えは、彼らが声を上げる元気もない程に疲弊しきっていて、悪循環の渦中に居て構造的に抜け出せないからだということになる。「貧困から抜け出すにも金が必要」のだ。

だがこれらの諸構造は、キリスト教や米国民が至上の価値として絶対視する「自由」の一つの形に過ぎないのではないか。だとすれば人類には実は「完全な自由」よりも、例えばイスラム風の男女差別や因習の押し付けの方が適切だということになるのだろうか。

私はそうは思わない。自由は依然として至上の価値である。米国民には自由に加えて、「全員が精神的に豊かに生きる本来の社会構造」を教授すべきなのだ。この本での多くの事例を見る限り、貧困層は金銭的にも先に精神的に荒んでいる。あたかも自由と言う大平原に裸で放り出されて、方向感覚すら失っているようだ。

それでは最後に、本書の教訓で何か日本のワーキング・プアに参考になることはあるのだろうか。日本にも構造的に改善を放棄した米国的貧民層が増えつつあることは事実である。

・年収180万・日雇い生活する42歳のリアル「ブラック正社員よりはマシ」

<https://nikkan-spa.jp/1313369>

・46歳貧困男性が自己責任論を受け入れるワケ

<https://headlines.yahoo.co.jp/article?a=20170420-00168102-toyo-soci>

ただ幸いなことに日本はまだ、米国ほどに社会資本が食いつくされていない。非正規等の「働きほどにもらっていない人」対策も、今すぐに手当てすれば間に合うのではないか。そうは言ってもまだ日本は米国が反面教師でしかないほどに、なんとか手当てが間に合う所に居るように思う。

22、「アマゾンと物流大戦争」を読んだ

私は物流や小売業界に属する人間ではありませんし、今後もその予定はありません。ですから始めに、何の目的で私がこの本を読んだのかを記しておきます。

瞑想録(その19)

計算機とIT技術の進歩で、世の中は人が次々と機械に置き換わっています。今や生命保険の給付金査定業務のような「知的職業」ですら、AIに取って代わられています。そんな趨勢にあって最後まで置き換えができなくて結局は人海に頼らざるを得ない、最後の砦が物流小売業界だと思えました。この本で学びたかったことは、そんな分野の実態と未来像です。

つまりその徹底した「反デジタル性」あるいは「アナログ性」の実態とそれに対する人や企業の対決模様、これを見たかったわけです。実際どうしても人海に頼らざるを得ない場面は意外と多くて、しかも近年のデジタル技術の進歩によって逆に、人海の牙城的分野が炙り出されてきました。

例えば各家庭への電気・ガス・水道の引き込み、これは戸建てごとに配置等が全部違って人海です。あるいはオフィスビルの建設、箱の方は工場のプレハブにより2か月程度で建ってしまうのに、そのあとの個別の内装工事に半年近くもかかっています。さらに大抵の場合モノの値段の半分は小売りコストです。大量仕分けと大量配送になじまないからです。

とは言え、上記の動機に反論する人も居ることでしょう。世界で最初に「ワンクリックモデル」を構築してネット販売を革新したのが外ならぬアマゾンで、アマゾンはこの勢いでネット通販のガリバーになりました。アマゾンはむしろ「ITリーダー」と言う位置づけなのではないでしょうか。

これは事実なのですが、ワンクリックはいくら強力とは言え、物販小売りのうち一番IT化しやすい一部分を省力化したにすぎません。現にネット注文した商品の倉庫でのピッキングもラストワンマイルの商品の発送も、今でも依然として壮大な人海です。

こんな業界におけるコストダウンと品質維持の努力は一体どのようになされているのか、興味がありました。コンビニの「旨い食べ物」の維持努力にも通じるところがあります。ちなみにこの本の著者は、やはり物流ベンチャーを経営しコンサルタントも兼ねるこの業界の第一人者です。

この本の答えは予想通りでした。答えから言いましょう。物流小売と言うのは統一原理や普遍法則のない個別的な試行錯誤とノーハウの塊であって、そのノーハウをいかに徐々にシステム化し高度化していくかです。この小さな努力の地道な積み重ねが、この業界に属する企業の勝敗を決めると言うことです。

瞑想録(その19)

ノーハウは非公開の面もありますが、そもそも一言で言えない性格であるために簡単には盗めません。そしてそれが比較的長期に亘る財産、つまりその企業の安定収入を約束してくれるわけです。そしてシステム化することにより人海を含む膨大なコストと無駄を、如何に少しでも軽減していくかが勝負のしどころです。

そしてこの本の著者がこれまで見てきた成功事例と失敗事例の検討によりますと、早く首位になろうとして大攻勢を仕掛けたところはたいてい失敗して、少しずつ試行錯誤を繰り返してうまくいきそうな手立てのみを徐々に広げたところ、つまりノーハウを一步一步亀のように着実に積み上げてきた企業が最終的に勝利を収めているそうです。

ちなみに物流と小売りは厳密には違います。大量輸送であっても物流であり、個々の客の要望を末端で細かく満たすのが小売です。この意味でアマゾン配送についてはヤマト運輸等の宅配業者に委託していますから、強いて分類すると小売業になります。但し今後はこれらの境目が低くなると多くの人が予想していて、アマゾンもドローンを用いた安価宅配等を研究してはいるそうです。

ちなみにアマゾン等のネット通販のノーハウは統一原理でなくケーススタディだと言うことですが、ケーススタディと言う思い出すのがハーバード等米国の一流大学のMBAコースです。これらのコースの教授陣は、「我々の教授法はケーススタディだ」と胸を張って言います。でもこれって「うちの分野に統一原理はないのだよ」と告白しているのと同じですから、本来なら恥ずかしそうに言うべきではないでしょうか。

まあ数学や物理学を専攻した人には、さもそのように見えることでしょう。でも世界のあらゆる業界を見回してみると統一原理がある方が例外的であって、ほとんどの業界がケーススタディとノーハウの塊なのです。その意味では「よほど現実的である」ともいえます。

つまりアマゾン筆頭とするネット通販業界の究極の財産とは、「ノーハウを蓄積するノーハウ」と言うある意味メタなものなのです。これは一種の企業風土と言うかDNAで、多分に人に付く「技術」と言えます。これらをいかにシステム化するかで、各社が競い合っていると言えるでしょう。

そしてノーハウとは言いながら「情報」と言う新大陸においては、まだまだ一発逆転のチャンスがあります。いろんなアイデアを少なくとも試す価値があります。そして特に一番ネックの配送料金を、「いかに低価格化するか、究極的には無料化するか」が勝

負どころの一つです。つまり①便利さと②価格の安さが勝負のしどころなのですが、それでも経営者は成功すると一気に「IT長者」に成れます。まだまだ新大陸なのです。

その新大陸ならではの事象が、「昨日まで無関係だった企業や業界と今日はしばしばガチンコの戦いとなる」という点です。怖いですがロマンもあります。アマゾンも①最初の敵は店舗の本屋、②次はウォールマートのような店舗ガリバー小売り、③その次は楽天やヤフーのようなモール型ネット通販、④更に次はアップルのようなスマホ産業、⑤そして今はグーグルのような総合検索ガリバーです。いずれは⑥人工知能やIoTの取り合いになることでしょう。あるいはドローンやロボット関連あるいはそれらを通して、今のところは協力関係の⑦宅配業者が明日の敵かもしれません。

最後に脳の作用機序との関連で、私の一言です。今までの記事で私は脳の作用、典型的には「言葉や心象の脳内の分布と守備範囲」にも一般則はなくて1つ1つの経験の積み重ねである。そしてその故に、一人前の社会人になるために20年も学生をし続けたいといけなと論じてきました。そして本書を読んでいて、物流小売と脳の成長は非常に似ていると気づきました。

この本によると、物販チェーンを展開するときの重要な経営判断に「中間物流センターをどこにどれだけ作るか」が大事で、その際のキーワードが「リンクとノード」だそうです。ここでノードとはストックポイント(物流センター)の位置でありリンクとはこれらを結び付けて商品を融通し合うルートのことです。そして脳の「マクロにはネットでミクロには位相で」と言う構造が、これと全く同じだと思いました。

23、意味を成す機構

先日「意味を成すとは」と題した記事で、なぜ「山岳小説」はあって「平野小説」はないのか、その時の脳作用について検討した。本日はこの議論をもう少し掘り下げてみたい。

先の記事でも見たように、複合語が意味を成す場合には必ずそれに応じた固有の感動とか存在感とか言った「ひとまとまり」が存在している。基本的には事前に存在していて、新語を作る前からその必要性に薄々気づいている場合が多い。ただしできてから「そう言えbaumい」のように、後で必要性に気づく場合もある。いずれにしてもニーズがあるからその新語は生きるわけだ。その意味で脳の作用は、物理とは違うと言いながらも極めて効率的である。

瞑想録(その19)

但し常に最小作用の原理が成り立つかと言うと、脳は生き物なのでそこまでではない。例として「嫌らしい」と言う語を検討してみよう。これは「卑猥だ」とか「みだらだ」と言った意味で使われている。成り立ちは「嫌だ+らしい」であろうが、意味は単なる足し算ではなくて結構屈折している。つまり同じ意味の語を作るのに、もっと近いところから拾ってこれそうに思えるのだ。でも現実には「嫌らしい」が定着している。この例で見るように、脳の作用は効率一本と言う訳ではない。

「山岳小説」、これは結構最小作用の例だと思う。他の付け方としては例えば新田次郎先生にちなんで「新田物」とか色々ありうるだろうが、まあここでは素直な合成語が採用されている。だがこの何気ない合成語にも、実は脳の偉大な働きが隠されている。

「山岳」と「小説」、この2語同士はまるで関係がない。もし距離や相関を問うならば、限りなく遠くて無関係である。そしてこれほど無関係なものを足そうという思いつき、これをランダムにやろうとすると気が遠くなるほど大変なことだ。ここにはやはり脳に特有の、連想や勘やひらめきと言ったアナログ選択作用があると言うべきだ。

ちなみにこう言う「言葉の発明」は、週刊誌の最も得意とするところだ。千石剛賢さんを「千石イエス」と名付けたり、佐藤優さんを「外務省のラスプーチン」と名付けたり、あるいは米国の部下に関係を迫ったマリアと言う女上司を「性母マリア」(せいぼまりあ)と名付けたり、この辺はもう神業の領域に入る。

ところで1つ前の段落で、「山岳と小説は無関係に遠い」と言った。しかしその無関係から「山岳小説」と言う新語ができた後は、「山岳」と「山岳小説」の組み合わせあるいは「小説」と「山岳小説」の組み合わせは、それぞれ近い。

そして数学の等号の推移律である「等しいものに等しいものは元のものに等しい」から類推するならば、「近いものに近いものは元のものに結構近い」はずだ。だが「山岳小説」と言う語が認知された後もその媒介作用によって「山岳」と「小説」が近くなると言うことは全くない。依然として無相関に遠いままだ。これは単語のネットワークが距離空間ではないことを意味している。つまり脳の作用を記述するのに、従来のデジタル数学は使えないということだ。

先日「アマゾンと物流大戦争」と題する本の感想をまとめた時に、「物流拠点の立地手順はリンクとノードがキーワード」であって、これは脳の作用の「近いものは空間で、遠いものはネットで」と言う2段構造を示唆すると指摘した。今まさにその通りであって、

瞑想録(その19)

ノードにならずリンク程遠いものはどんな新規事態があろうともリンクのままで遠いのだ。

ある人がスキーに行ったときに、スキー場のパウダースノーを見て「雪々しい」(ゆきゆきしい)と表現した。その意味は、「雪が踏み固められてじやりじやりする前の降ったばかりのふわふわした状態にある」と言った感じだろう。もちろんこんな単語はないしよほどの有名人が使わない限り定着もしないだろうが、意味はそれなりに通じる。「ガキガキしい」も同様で、幼稚すぎて付き合えないと言った感じだ。これらはいずれも、「バカバカしい」とか「白々しい」とか「苦々しい」と言った造語手順に則っているから、余計に意味が通りやすい。

似たような「言語の守備範囲のアナログな例」を挙げよう。例えば「チミニー」と言えば「君ねえ」のことだと分かり、「オゲンコ？」と聞けば「お元気？」のことだと分かる。「ダメポ」と言えば「駄目だ」の意味で「コリヤダミダ」とも言う。「シミツ」と言えば「秘密」のことだ。あるいは広(まだれ)の右下部に「マ」と入れてこれをあたかも漢字のように、「悪[広マ]」とか「色[広マ]」とか入れるとそれぞれ「悪魔」「色魔」と読めてしまう。このように言葉や心象の理解は、別単語の領域を犯さない範囲で結構自由如意である。

ところで、人の脳がその感触なり言葉なりについて存在価値を感じる、つまり記憶する価値がある程の閾値以上のインパクトを受けるとはどういうことであろうか。これについても以前にモチーフ認識の記事で見た通りだ。絵画の場合を例にとると、デジタルな意味(家、山、人等)とアナログな感じ(色調、勢い、形状等)を同時に認識して、かつ両者を区別せずに混ぜて同時に使うことにより、その脳内位置を確定している。

ではより複雑な小説やアニメの場合はどうかと言うと、これらも基本的に絵画の場合と同様である。例えば「その日の朝、山頂は霧に覆われていた」と言う文章があった時に人は「山、頂き、霧」と言ったデジタル認識と、「茶色と白の対比、白のもやもや感、茶色部分の力強さ等」と言った雰囲気つまりアナログ認識を同時にほぼ同等な情報として得て、これらを即混ぜつつ自分の立ち位置を脳内確定しているのだ。

最後に人と他人とのコミュニケーションについて指摘したい。ここで問題なのは人同士の情報流通交換の手段に、「見るか・読むか」の2通りしかなくてかつこれらが全く別であって統一できていないことだ。書き手や描き手も鑑賞者に自分とほぼ同様の脳内認識をしてもらえるように最大限の努力をする。それでももし宇宙人や未来人類のように、「脳波の直接交信」ができる場合に比べれば極めて隔靴搔痒で、我慢できないほどだ。

24、ブログの役割と未来

私はヤフーブログの供用開始その日とともにこのブログを立ち上げたので、もうかれこれ足掛け13年がたつ。私のブログ歴は一般平均よりは長い方だろう。ブログが出現する前は普通のホームページを20年ほど前からやっていたが、そこは既に閉鎖してしまっている。

ブログは「ホームページの日記版」と言う位置付けだ。だからブログの変遷と将来にはその背景に、ホームページあるいはバーチャル空間の役割と変遷と将来があることになる。そしてその上に、ブログ特有の特徴があるということだ。

バーチャル空間はそもそも文字や写真のためだけにあるわけでない。むしろ広く科学技術計算とか経理伝票整理とか、さらにそれ以上に人が読むことを想定していない記号列の世界が圧倒的に広い。文字や画像などむしろほんの一部だ。

そしてそのITハード世界の特徴は「年に2倍」と言う記憶容量の長足の進歩、それに並列マシンと言う処理技術の革新である。年に2倍とは10年で千倍であるから、10年でキロがメガになり、メガがギガになり、ギガがテラになってきた。そしてビッグデータが産業として成り立ち始めている。

電子文書の一番の貢献は、貧乏な素人が別段著名でなくても好きな意見を主張できるようになったことである。わざわざ本にする必要がなくて、敷居が極めて低くなったのだ。もちろん「どの程度読んでもらえるか」と言う問題はあるものの、この性格のおかげで世の中は限りなく直接民主制に近づいて、政治屋の内輪で小手先のロビー活動はほとんど意義を失った。

電子文書の2番目の利点はいつでも後追いで訂正できる点だ。印刷された本だとこれができない。そのおかげで遥かに気楽にものが書けるようになった。仮に批判されるとか間違いに気づいたら、その時点で後追いにより訂正することだけのことだ。キーワードを最初に書き出しておいて後に順序を並び替えるという自由度も獲得した。

現状で一番神聖視されている「科学的手続き」の金科玉条は「無謬」であり、バカバカしいことだがしばしば無謬のチェックの方に発見そのものよりもはるかに膨大な手間暇を取られる。だが電子文書の登場によりこの気苦勞が一気に解消した。将来は科学手続きが地滑りしてその地位を失い、「無謬絶対視」が相対化されるだろう。

文書電子化の最初のエポックはホームページと言う形である。30年くらい前のことだ。「ホームページ」と言う文字通り、「記事をまとめて一軒家」なる体裁であった。それが検索技術の発達により、家ではなく記事ごとに分断された。

欲しい記事に一つポータル(玄関)を経由する必要はなくなり、ホームページの「家制度」は崩壊した。そしてそれとほぼ同時にブログが登場した。ブログは記事の時系列であって、玄関とか門は不要だし現にない。これは例えるならば、日記の電子版だ。

さてブログの特徴は何と言っても時系列なことだ。これは長所でもあり欠点でもある。新聞と同じで古い記事は、たとえその内容に時間を超えた普遍的な高い価値を持つとしても、もはやほとんど読まれなくなる。これが極端だったのが今は「あってない」ミクシーであるともいえる。たとえ質の高いコメントを入れても、それより後の数的に圧倒的な下らないコメントに埋もれてしまい、ついに飽きられた。

さてこれまで十数年のブログの変遷を、自分なりに振り返ってみよう。思うに一番大きな変化は「老人化」だ。今やブログは「老人のツール」と断定して良い。もしあなたが60代なら、ブロガーとしてはまだ青年会だ。90代で現役と言う人もちらほら見る。この大きな理由は、若者達がフェイスブックとかツイッターと言ったより新しくて高機能な媒体に抜けて行ったからだろう。

第2の変化は、当初ブログの大きな売りだった「トラックバック」(TB)がほとんど使われなくなり、コメントも大きく減ったことだ。相手のブログへの「お返しコメント」はもちろんのこと、自分のブログに書き込まれたコメントの返答すらかなりされなくなった。この理由はおそらくそう言った「仲良し機能」を期待する人達が、先に挙げたSNS系の新ツールに移っていったためであろう。

そして第3の変化は、ブログの「ツイッター的利用」が増えたことだ。ツイッターは「140字のブログ」とも言われるように、ブログの進化形である。特に若い人は気が短いので、こちらに移った上で気の合う仲間通しでサークルを閉じて使っている場合が多い。他方老人は暇でかつ要約が面倒なのでブログをツイッター代わりにして、140字を超えるたわいもない内容を1日に何回もアップしている人が目立つ。

これらの結果により第4の変化だが、ブログの記事の賞味期限が短くなった。集客力が一番高いのはグルメ記事だが、それにしても次の日になると集客力はもはやほと

瞑想録(その19)

んどない。ましてやまじめな記事の賞味期限はもっと短くて、最初の2～3時間でほとんど無くなる。

この理由はおそらく、これが第5の特徴になるが「新規アップ記事一覧」を利用している一見(いちげん)さん達が、たいして読まずにアクセスを乱発しているということだろう。だから実際に記事を最後まで読んでいる人は、表示される公称人数の半分以下だと思われる。

第6の特徴として気まぐれがある。記事のアップにしてもコメント常連者にしても、ある日突然ぱったり放置したりやめたりとか、あるいはまたある日突然思い出したように再開したりとか、日常茶飯事だ。だがこれはブログに限らず、仕事でない遊び全般に見られる特徴であって、私はむしろ「長続きのコツ」と肯定的に捉えている。

さてブログのおかげで、我々が知りうる情報は極めて広くなった。遠い地方や外国の名所等はもちろんのこと、全く無関係な人の隣の猫の調子まで、知ろうと思えば知りうる。世の中の趣味の多様さや人種の多様さについても教えてもらった。だがこして可能性が広がった上で再度ブログを見まわしてみると、その割にどの地方の誰の出来事も結構似たり寄ったりだ。結果として世の中の凡庸さに気づかされて、私はある意味がっかりしている。

私自身は会社員以外やったことはなく客商売のつらさは知らない。だがブログで教わったことの一つに、「同じような記事アップでも偶然により来る客の人数は平気で倍半分の変動をする」という事実がある。まあ道路の混みようによっても体感できることではあるものの、ブログはある種店舗の性格があるように思った。

さてこうして落ち着いてきたブログの今後を予想しよう。SNS系の新ツールにかなりの客層を持っていかれたが依然として存在していると言うことは、固有の価値が認められたということだ。今後は安定期に入って、ほぼ今の調子で推移していくのではないか。記事はマンネリでも日々の的には新しい。もしミクシーのように終わるなら、もうとっくに終わっているだろう。

最近老人ホームで本来ギャンブル遊具であるパチンコや麻雀が、ボケ防止に役立つという理由で積極導入されている。このようにブログも少なくとも医療費抑制のための社会的公器として、一定の価値を持ち続けるものと私は予測する。

瞑想録(その19)

2017. 05. 03